聖杯†無双

疎陀　陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖杯†無双

【Ｎコード】

Ｎ００７２Ｘ

【作者名】

疎陀　陽

【あらすじ】

本作はＴＩＮＡＭＩで連載ストップしていたお話を新たに書きなおし＆追記をしております。プロットからやり直しましたが……なんとこのお話、疎陀名義になっておりますが、『悲恋姫無双』のＮｉｇｈｔ様との合作になります。『悲恋姫無双』のアフター、『有り得たかも知れない外史』の一つと思って頂いて結構……らしいです。ですから、二次創作であり、クロスオーバーであり、三次創作でもあります。一応、『Ｎｉｇｈｔさん公認』という扱いに……なるのかな～？

……さらっと書きましたけど……凄くね？　それ。

お話の性質上、『悲恋姫無双』を読了後の方がより楽しめるかな、と思います。お手数ですがそちらにも目を通して頂ければ。大丈夫、面白いから！

作者二人でえっちらおっちら書いてますので、認識の齟齬が多少出る事もあるでしょうし、さらにはかなーり不定期になりそうですが……がんばりますので、宜しくお願いします。

あ、最後にこれだけはどうしても言いたい！　こんな機会が出来たのはひとえにひんめる様のブログのお陰。多謝！

プロローグ

死の瞬間。

……人は、自身の生涯を振り返ると言う。

今際の際に迷い、立ち止まり、思う。

それは……正に走馬灯。

「……しっか……くだ……いま、医師を……」

途切れ途切れに漏れ伝わる声を聞きながら。

私は自分の生涯を振り返る。

……一言で言えば、恵まれた人生だっただろう。

目標を持てた。

その目標に向け、たゆまぬ努力をした。

自身が正しいと思う道を選んだ。

その道を、後悔せずに胸を張って堂々と歩けた。

その結果が……今、私がある全てのもの。

（……全く……いい人生だったわ）

この世界に私のやり残した事はもう何も無い。

全てを成した。全てを遂げた。後は朽ちるままこの体を、大地に帰すのみ。

そう。もう、何も無い。後悔など、何も――

……本当に？

本当に、何も無いの？

後悔は、未練は、やり残した事は……

……本当に、何も無いの？

その想いが、私の体を熱くする。

「……い……た……い」

「……さ……！　ど……さ……まし……か！」

……逢いたい。

……一目で、いい。逢いたい。

笑ってる顔がみたい。

怒ってる顔がみたい。

拗ねてる顔がみたい。
泣いてる顔がみたい。

私を……私を愛してくれた、貴方の顔がみたい。

どんな顔でもいい。どんな姿でもいい。

ただ……一目、貴方に逢いたい。

「……さ……ま……！」

……死ねない。まだ、死ぬわけに行かない。だって、あいつは帰って来るって約束したから。

その姿を、一目見る前に私が先に逝く事なんて、許せない。

遅かったと怒ってやらなければいけない。

寂しかったと拗ねてやらなければいけない。

あいつの……愛しい男の腕で、精一杯甘えなければならない。

「……」

既に、周りが何を喋っているのか、その正確な意味を理解する事は難しい。死は、ヒタヒタと、しかし確実に私に迫って来ている。時間が……時間が無い！

神に祈る。

この世界に存在すると言われるどんな神でもいい。

お願いだ。

何でもする。

何でも出来る。

例え、業火にこの身を焼かれようとも後悔はしない。

だから。

私を……私を彼に逢わせて！

≪汝の言葉に、嘘偽りは無いか？≫

誰！

≪汝の言葉に、嘘偽りは無いか？≫

……答えないつもり？　それとも本当に神様かしら？

なんでもいいわ！　私は嘘は言わない！　彼に逢わせてくれるなら、私は何でもするわ！

≪……汝の望み、しかと心得た≫

……心得た？　どういう事？

≪今、此処に汝と契約を結ぶ≫

契約？　なんの事よ！

≪悠久の時の中、いつか汝の想い人に逢える日も来るだろう≫

逢える？　逢えるの？　本当に逢えるの？

私の……私の愛しい、あの……

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「……よっしゃーー！　ナズナ発見！　これで七草粥の材料、全部ゲットだぜ！」

物を取得した時に使われる言葉ナンバーワンであろうその台詞を……今なら、『とったど～』かな？　天に向かって絶叫し、私は一人、手の中の『戦利品』をしげしげと眺める。

「いやー、あるものね、ナズナ。冬木も都会だ都会だと思っていたけど、そうでも無いみたいね～」

うん。最近は冬木の街も拡張工事やら何やらかんやらで、随分と都会になったものだと聞いていたが……まだまだ充分田舎ね、冬木！

「……って、そうじゃないでしょ、私！」

い、いかん、いかん。ついつい趣味の野草採取に熱中してしまったわ。で、でも……仕方ないでしょ？　だって、何だかいい感じの

日光で、河原には沢山野草が生えていて、しかも、お目当てのナズナまで発見しちゃった日には……そりゃ、するでしょ？　野草採り。登山家がそこに山があるからって言うのと同じぐらい、自明の理じゃない？

「……って、誰に言い訳してるのよ、私は」

一人こつんと頭を叩き、舌を出してみる。うん……可愛い！　可愛いって言ったら可愛いの！

「こんな日にも野草採りをするなんて……私も結構、大物かもね？」

まあ、ただのアホだと言う説もあるが……気にしない。

「……さて、それじゃ……」

帰りますか。我が家へ。

……と、その前に。自己紹介をしておこう。

私の名前は沙条綾香。

性別、女。

所属、私立穂群原学院、２年Ａ組。

外見的特徴、眼鏡。黒髪。

性格的特徴、別段、人と仲良くしたくない訳では無いのだが、何となく人との距離感が巧く掴めない。デレた事の無いツンデレ。勝気。だがしかし、コンプレックスの塊。若干、厭世気味。某巨大掲示板風に言うと『鬱だ、死のう』

総合的にみて……結構、ダメ人間。以上、自己紹介終了。

……え？　短い？

いえいえ、奥さん……じゃないけど、皆さん。昨今の女子高生で、これだけステータスがあれば充分でしょ？　女子高生ブランドに、眼鏡、黒髪。しかも、ツンデレ（デレないが）ですよ？　ほら、それだけで食指がなんとなーく動くでしょ？　貧乳でも良いよね？　ステータスだもん。

……それでも短い？　そうね……それじゃ、後一つ。取るに足りない、私の自己紹介を。

実は私。

魔術師なの。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ええっと……イモリの串焼きは用意したでしょ？　後は……」

召喚陣の前で、一人魔術書とにらめっこしながらぶつぶつと。

服装は中世ヨーロッパの魔女みたいなフード。

眼の前には沸騰した大釜。右手にはイモリの串焼きを持つ女子高生。

……うん。私、気持ち悪い。

……まって。お願いだから引かないで。多かれ少なかれ、魔術師って『イキモノ』はこういう物なの。

……だから待ってって言ってるでしょ！　魔術師は『根源』って所に至る為、日夜象牙の塔に籠って一人研究に励むの！

魔術の道は深遠、文字通り遠くて深い。

そんな魔術の一つの到達点に至ろうとしたら、どうしたって人間

おかしくなるの！　だって、何年も何十年も一人で塔に籠って研究よ？　どうしたって少しはおかしくなるでしょ！　これで精神に異常をきたしてなかったら、超鈍感なアホか、もしくはドMよ、ドM！

……オッケー、理解したわ。確かに初めてみた人は気持ち悪いかもしれない。

私の家、沙条家は代々続く……と言っても精々三代、百年程のものだが、『魔術師』に名を連ねる御家柄だ。

周りの女の子がリカちゃん人形で遊んでいる時、私は藁人形で遊んでいた。

周りの男の子が『ポ〇モン、ゲットだぜ！』とはしゃいでいた時、私は『悪霊、ゲットだぜ！』と日夜修行に励んでいた。

周りのみんなが『お母さん……私、彼氏出来たんだ！』なんて、今流行りの友達母娘をしてる時、私は『お母さん……私、男の子呪ったんだ！』と修行の過程を母に逐一報告していた。

……言ってて悲しくなってきた。なんだ、この青春。

まあ……とにもかくにも、私はそうやって生きてきた。だから、私自身、他の人と変わっている事は重々承知している。

それは、魔術師の家に生まれたものの宿命。

生まれおちた時より、その生は『根源』に至る為のプロセスの一つにすぎない。

言うなれば、歯車。一族の宿願を果たす為、ただ回る為だけの歯車。

くるくると。

くるくる、狂々と。

可哀そう、と思われる筋合いは無い。どうせ生物なんてものは、次の世代に命を繋ぐ為の歯車でしか無い。子を生し、朽ち果て、子が更に子を生し、朽ち果てる。魔術師と一般人では、そこに明確な目的意識があるか、無いか、その違いだけに過ぎないと思う。

……話が逸れたわね。

我が家に伝わる魔術系統は一つ。

『呪術』だ。

……今、鼻で笑ったやつ。後で覚えときなさい。呪術の怖さをイヤって程思い知らせてやるから！

昨今の魔術師業界じゃ、フォーマルクラフト、所謂元素変換の魔術が主流だけど……

私に言わせれば、あんなもの、『頭の悪い魔術』以外の何物でもない。

だってそうでしょ？　元素魔術ってのは水や火、風といった五大元素を素に行われる魔術だけど……

んなもん、別に魔術使わなくても良くない？　火がつけたかったらライター使えば良いし、水が欲しければ蛇口を捻って御覧なさいよ。風が欲しいんなら扇風機つければいいし。

科学で代用できる事を魔術でやってどうするのよ？　意味無いでしょ、そんなの。そんなものに血道をあげた所で、『根源』なんて絶対に至れない。

その点、呪術は違う。陰湿、と言われればその通り、否定はしないが、呪術は『未実証の科学』未だ、科学で解決できない唯一の科学的聖域。そこにこそ、『根源』に至る可能性が残されている……のではないかと、沙条家は考えたらしいのだが……

「……こんな事、させないでよね」

この冬木の地では、一つの魔術的大儀式が執り行われている。

あらゆる者の望みを叶える、『万能の釜』を手に入れる為に行われる、一つの儀式。

『聖杯戦争』

聖杯、と言ってもキリストの血を受けた聖遺物では無い。『願いを叶える』、というただその一点のみで『聖杯』と呼ばれる贋作に過ぎない。過ぎないのだが……

「……楽して『根源』に至ろうなんて……考えが甘いよ、おじさんは」

魔術師は一人しか後継者を育てない。理由は様々あるが、詳しくは割愛。同じ家に生まれたとしても、魔術的素養の無かった父の弟……つまり、私の叔父は普通の人として育てられた。

普通、魔術師の家系に生まれた者に取って、自分に魔術を教えて貰えないと言うのは、人生の落伍者に等しい程の激しいコンプレッ

クスになるものなのだが……この叔父、人間が出来ているのか、はたまたコンプレックスとは無縁な図太い神経をしているのか、それともその両方からか……とにかく、びっくりするぐらい大らかな人間に育った。まあ、ただのアホだったという説もある。私の自説だが。

『なあ、綾香』

『なに、おじさん？』

『聖杯戦争って知ってる？』

『聖杯戦争？　ああ、あれでしょ？　冬木の街で行われるっていう』

『そうそう！　それ！　ほら、綾香。その聖杯って何でも叶えてくれるんだろ？』

『らしいわね。眉唾だけど』

『それでさ。ほら……何だっけ？　魔術師の宿題の……そう！　『懇談』！』

『……何を話し合うのよ』

『あれ？　『墾田』だっけ？』

『……耕してどうする』

『『電源』？』

『どんどん遠ざかっているわよ』

『ええっと……『混乱』？』

『それは正に今の私の心境ね。『根源』よ。根源に至る事こそ、魔術師の命題』

『そうそう。根源。その根源に至る方法を、聖杯戦争で優勝して教えて貰えば？』

『優勝って……あのね、おじさん？　知ってる？　聖杯戦争ってのは人間とサーヴァント、つまり英霊が血みどろの殺し合いを行うとても危険な……文字通り、『戦争』なの。第七階位の私がそんな所に行くなんて、のこのこ殺されに行く様なものなの』

『大丈夫だって。途中リタイアした人は、教会が保護してくれるらしいしさ。ほら、出てみるだけ出てみなよ。優勝したら儲けもん、ぐらいでさ』

……以上、回想終了。

まあ、この叔父に押し切られる形で、私は渋々参加を決めた。正直、出ても勝てる気がしないし、負ける前提で勝負に挑むのはバカのやる事だと思っているが、私は小さい頃からこの叔父が若干苦手。コンプレックスの塊の様な私からしたら、それを微塵も感じさせない叔父に、太陽の様な眩しさを感じるからとか、父を早くに亡くした私の面倒を父代わりに見てくれたからとか……まあ、理由は沢山

あるが、『行かないと、向こう三カ月お小遣い抜き！』と宣言されたのが一番大きい。

「……それにしても……」

眼の前のテーブルに置かれた古ぼけた木簡に眼を落とし、一人溜息をつく。

繰り返すが、我が沙条家の魔術は『呪術』。呪術使いの私にとって、召喚なんてもの、やっと事も無ければみた事も無い。

そんな私が、英霊の召喚？　出来る訳無いだろう。

『大丈夫、大丈夫！　この木簡があれば、綾香でも出来るって！』

叔父の、能天気の声が脳内再生。魔術の勉強をして無かったから仕方がないと言えば仕方がないが……アンタ、魔術舐めてるだろう？

「……ま、いいか」

召喚が出来なければ……それはまあ、それでもいい。元々、出たくて出る訳じゃないし、召喚出来なければ叔父も諦めがつくだろう。そもそも、チートで『根源』に至ろうって言うのが、個人的には趣味じゃないし。

「……まあ、それでも……『最善』を尽くさないのは……趣味じゃないし」

手に持った本を閉じて、眼を瞑り、大きく深呼吸。

……イメージは、扉。

『こちら』と『あちら』を繋ぐ扉を開け、そこにいる者を引っ張り上げる。

「……六道の辻より黄泉の国。黄泉の国の其が奥に、世界の裏側たたずみて……」

……懇願では無く、命令。

『来て下さい』では無く、『来なさい』

「……沙条綾香の名に置いて命ず！　汝、現世に来界し、我が助けとならん！」

……。

……。

……何も起きませんでした。

「……」

……いや、ね？

私だって、召喚が巧い事成功するとは思って無かったわよ？　初めてやる魔術だし、十中八九失敗だろうな～なんて思ってたけど……でも、これは無いんじゃない？

普通、召喚魔術の……って言うか、昔っから魔術師の失敗は爆発って相場が決まってるでしょ？　何も起きないってなによ、何も起きないって！

「……まあ、才能があるなんて思っちゃいないけどさ……」

私の魔術師としてのクラスは『第七階位』。下っ端もいい所だ。

「それにしたって……」

何だろう。もの凄い恥ずかしい。『出来るよ！』って言われて、勢い込んで『かめ〇め波』の真似をしてみたけど、何にも出なかった中学二年生ぐらいに恥ずかしい。

「……ま、良いか」

欠伸を一つ。ま、これで叔父さんも納得するでしょ。そもそも、私に召喚の才能なんて無いんだ。大体、根源に行きつくのに聖杯に教えて貰おうなんて、そんな浅はかなかんが――

振り返って……私は息を飲んだ。

真っ暗な、屋敷の地下室で、まるでそこだけ日光を浴びたかのように、後光が差して見える一人の少女。

意志の強い瞳に、シニカルな笑みを浮かべた一人の少女。

この世のものとは思えない整った顔立ちをした……一人の少女が。

静かに、口を開いた。

「……問うわ。貴方が……私の『マスター』？」

第一話

「ええっと……粗茶ですが」

「ありがとう。頂くわ」

「いえ……お気になさらず」

沙条家の工房……と、言うほど大したものでは無いが、まあそこそこ豪華な洋館の客間。

そこで、私は先ほど召喚したサーヴァントとお茶しています。

……なんだ、このシュールな光景？

「……あら？　これはなんて言うお茶かしら？」

「え？　ええっと、紅茶ですけど……」

「これが紅茶……」

サーヴァントのお姉さん……というか、まあぶっちゃけ同い年ぐらいなんだろうけど……

「……美味しいわ」

……うううう……負けた。なんだ？　あの花が咲く様な可憐な笑顔。

「貴方は飲まないの？」

「あ、い、頂きます」

「貴方の淹れたお茶でしょ？　遠慮せずにお飲みなさい」

紅茶のカップを軽く持ち上げ、微笑んで見せるサーヴァント。

……サーヴァントって『従者』よね？　私、『マスター』よね？

なんでこいつ、こんなに態度がでかいのよ？

よし。最初が肝心だ。ここは一発ガツンと――

「どうしたの？　早く飲まないと冷めてしまうわよ？」

「は、はい！」

……意志の弱い私、十七歳の冬。

「ふふふ。そんなに固くならないでくれるかしら？　こちらまで緊張してしまうわ」

いや、そう言われてもね。

このサーヴァント、オーラが半端無いです。まじ、パネェっす。

「その……私は、沙条綾香。貴方のマスターよ」

「そう。宜しくね」

「は、はい！」

「……」

「……」

「……え？」

「何かしら？」

「何かしら、じゃないわよ！　名前は！　貴方の名前！」

「私の名前？」

何よ、その『何を聞いているの？』みたいな顔！

「私が名前を言ったら貴方も名前を名乗るのが常識でしょ！」

「あら？　貴方、私の名前も知らずに召喚したの？」

っぐ！　い、痛い所を……

「そ、その話は置いておいて……真名。貴方の真名を教えてよ」

聖杯戦争で召喚されるのは、『サーヴァント』という名の『英霊』だ……多分。『英霊』とは、神話や伝説の中で為した功績が信仰を生み、精霊の領域まで押し上げられた人間霊のこと……らしい。

英霊を英霊となすものは信仰。故に、信仰が強ければ、実在の人物である必要はなく、真偽すらも問題では無い……と思う。

……『多分』とか『らしい』ばっかりで申し訳ないが、私だって初めての体験なんだ。知らなくたってしょうがないでしょ？

閑話休題。とにかく、英霊って言うのは『無茶苦茶有名な伝説上の人物』ぐらいで考えて貰えば、当たらずとも遠からず。まあ、規格外の存在ってワケ。

だが、英霊にしたって完全無欠な存在では無い。『人間霊』という言葉で分かる通り、どんなに強い人間だって……いつかは必ず死ぬ。

特に神話や伝説の中に登場する『人間霊』なんて、寿命で死んだ幸せな人物なんかいやしない。何かしらの罠や計略、毒、或いは呪いで死んでいる人が大多数。それが、そのままその英霊の『弱点』になる。

故に、聖杯戦争では普通、その人物の『弱点』が予想される『真名』と呼ばれる本名を呼ぶ事は無い。例えば、トロイア戦争の英雄、アキレウスを召喚した場合、そのものずばりでアキレス腱が弱点、と簡単に分かってしまう。弱点を徹底的に狙うのは戦争の基本、仮にも英霊となった人物だし、アキレス腱が切れただけで死ぬ事は無いのだろうが、それでも有効な対策には充分なる。

逆に言えば、自分の使役するサーヴァントの真名を知っておく事

は弱点を防御する為と、その人物の特性を知る為に絶対に必要な事。

……だから、私の問いかけはひどく正当な筈なのだが……

「イヤよ」

……一瞬で、拒否されました。

「……へ？」

「だから、イヤ。貴方に真名を預ける訳にはいかないわ」

「い、イヤって何よ、イヤって！」

「イヤな物はイヤよ。見ず知らずの貴方に、真名を預けるなんて真似、出来る訳無いでしょ？」

「出来る訳無いでしょうって……」

……私にどうしろと？

「そ、そんな事言っても……貴方が誰だか分からなかったら対策の立てようがないでしょうが！」

「……ああ、そういう事」

私の絶叫に、件のサーヴァントは、一つ納得したように頷いて。

シニカルに上げた、その花びらの様な唇を開いた。

「真名を預ける訳にはいかないけれど、私の『名前』は教えて上げるわ。我が名は孟徳。魏の覇王、曹孟徳よ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……魏の覇王、曹孟徳よ」

綾香と名乗った少女が、私の言葉に眼を丸くして驚いているのが見てとれる。

「……は？」

「だから、曹孟徳。この国では……そうね、曹操といった方が通りがいいのかしら？」

幾ばくかの茶目っ気を含めて綾香にそう、笑いかけてみる。さて、どんな反応が返ってくるか。まあ、恐らく『三国志に出てくる、あの曹操？』ぐらいの物だろうけど……

「そ、曹操？　三国志に出てくる、あの曹操？」

想像通りの反応に、思わず苦笑。ええ、素直の子は嫌いでは無いわ。

「恐らく、その曹操ね」

「曹操がこんな可愛い女の子なんて……聞いた事無いわよ！　そんなトンデモ説！」

あら、可愛い女の子なんて、光栄ね。

「どんな曹操を想像していたのかしら？」

「どんな曹操って……」

「……」

「……そもそも、曹操を想像した事無いし」

……失礼ね、貴方。

「では、驚く事は無いのでは無くて？　いいでしょ？　曹操が女の子でも」

「そう言われれば……うー……でも……」

宙を見上げてあーとかうーとか。何をそんなに悩む事があるのかしら？

「……まあ、いいわ。それじゃ、曹操、これから宜しくね」

「あら、いきなり呼び捨て？　魏王である曹操を？」

私の言葉に、思いっきり綾香がひるんだ。この姿……何だか、一刀を思い出すわね。

「い、良いでしょ！　私は、貴方の『マスター』よ！　サーヴァントに『さん』付けで呼ぶマスターなんて聞いた事無いわよ！」

「『さん』？　『様』でしょ？」

「さ、様付けなんて絶対呼べるか！　いいの！　私は貴方の事を曹操って呼び捨てにする！　イヤなら令呪使っちゃうんだから！」

からかい甲斐のありそうな子なので言ってみただけで、仮にも私の『マスター』になった人物に『様』付けで呼んで貰おうなんて思っちゃいない。

「冗談よ。それより、そんな簡単に令呪を使うなんて言っては駄目よ？　令呪を使いきった瞬間、私は貴方を……」

……殺すわよ？

「……」

……本当にからかい甲斐のある子。一瞬で顔が真っ青になった。

「……これも、冗談よ。仲良くしましょう？」

「は、はい！」

上下関係はしっかり……と、少しおかしい気もするが、とにかくどちらが上かは充分分かって貰えたでしょ。

その現実に満足し、私は『紅茶』をゆっくり口に含んだ。

「あら、『紅茶』がもう無いわ。綾香、入れてくれる？」

「は、はい！　ただいま！」

……少し、やり過ぎたかしら？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

……今、起こった事をありのままに言うわよ？

私、自分の召喚した『サーヴァント』のパシリ、させられてます。

……どうよ、これ？

だ、だって……あのサーヴァント、曹操らしいけど……めちゃくちゃ怖いんだもん……

「ど、どうぞ。新しい紅茶です」

「ありがとう」

「あの……一個質問、良いですか？」

「いいけど……敬語は辞めてくれる？　貴方は私の『マスター』でしょ？」

そう言われても、オーラが半端ないので……って、もう！　そうね！　私、マスターだもんね！　敬語なんてやめた、やめた！

「じゃあ……えっと、貴方のクラスは何？」

「クラス？」

はてな顔をする曹操。いや、何でよ？

聖杯戦争で召喚されるサーヴァントは全部で七騎。それぞれサーヴァントにはセイバー、ランサー、アーチャー、バーサーカー、キャスター、ライダー、アサシンの役割が当てはめられる。

ざっくりした言い方で申し訳ないが……まあ、ドラ〇エで言う所の『ゆうしゃ』とか『せんし』みたいな職業と思って貰えば差し支えない。

「貴方、聖杯からどんなクラスで召喚されたか聞いてる……って言い方はおかしいけど、知ってるんでしょ？」

「ええ」

「それを教えてよ」

「どうして？」

「いや、どうしてって……じゃあ、貴方の事をどう呼べばいいのよ？」

聖杯戦争ではサーヴァントの真名は秘匿中の秘。さっきも言ったけど、サーヴァントの真名はそのまま弱点になるからね。だから、普通は『セイバー』とか、『ランサー』みたいに、クラス名で呼ぶのが普通。

「私の事は曹操と呼んでくれて構わないわ」

いや、構わないって……

「それじゃ、弱点丸分かりでしょうが」

「弱点？　私に弱点なんて……無いわよ？」

自信満々にそう言って無い胸を張る曹操。いや、弱点が無いって……

「……何様よ、貴方」

「王様よ？」

「いや、そうでしょうけど……」

「……じゃあ、聞くけど……貴方、私の弱点言える？」

……曹操の弱点？

「……言えないけど……」

「でしょ？　私は神話の英雄の様に、誰かに騙し討ちにあったり、裏切られて非業の死を遂げたり……或いは呪いを受けて殺されてな

んかしてないわよ？　きちんと天寿を全うしたわ」

「……そうなの？」

「ええ。幸せな一生だったわよ、私は？」

いや、曹操さん。幸せな一生でも弱点の一つや二つは……

……ん？

「……幸せな一生だったの、貴方？」

「ええ。そう言ったでしょ？」

「……幸せな一生を送ったのに……貴方、英霊になったの？」

瞬間、空気が凍った様な感覚。思わず怖気がする様な、絶対零度の瞳が私を貫いた。

「……幸せだったからって、悔いが無いとは限らないわ」

それも一瞬。伏し目がちにそう言う曹操は……何だろう、年相応の『女の子』に見えた。

「……それで、クラスは？」

「クラス……そうね、この武器を見れば分かって貰えるかしら？」

そう言って、どこからとも無く曹操が『ソレ』を取り出した。

「……禍々しいわね」

「あら、失礼ね？　私と共に三国を駆け抜けた『戦友』よ？」

そう言って、その禍々しい『死神の鎌』にも似た武器を掲げて見せる曹操。

……んんん……あの武器でアーチャーって事は無いだろう。どう見ても槍じゃ無いからランサーでも無いし、あんだけ理性のあるバーサーカーって言うのも斬新だけど……それじゃバーサーカーじゃないし……呂布とかなら『赤兎馬』っていう馬が居るからライダーでも良いかも知れないけど、曹操だし……キャスター？　いやいや、キャスターならあんな死神みたいな……いや、逆にあれは魔術師っぽいのか？　でも、あれはガチンコ用っぽいし……

……って事は……

「……貴方、もしかしてセイバー？」

「最優なんて言葉、私に相応しいわね？」

ニッコリ笑顔を見せる曹操。いや……マジで？

「……ははは……私、セイバー引き当てちゃった……」

……まじで？

……セイバーって言えば、最優って名高いサーヴァントでも一番の当たりくじ。

それ、当てちゃったの？　第七階位の私が？　え？　え？

「……勝てるかも……」

……聖杯戦争、勝てるかもしれない。勿論、サーヴァントの優劣だけで聖杯戦争の勝ち負けが決まる訳では無い。決まる訳ではないが、最優のセイバーを引いたんだ。きちんと宝具を生かしきれば……

「……そう言えば、貴方の宝具ってなに？　その鎌？」

「これ？　これはただの私の武器。銘は『絶』よ」

「宝具じゃないの？」

「関羽や張飛、或いは呂布ほど私の武器は有名では無いから。宝具になるほどの神秘は宿して無いわ」

大事な武器だけどね、と笑う曹操。

「それじゃ……貴方の宝具は何？」

「……そうね。貴方とこれから共に闘っていく訳だし、私の宝具、見せて上げるわ」

そう言って、曹操が俯き、顔を下げ。

次に顔を上げた時、曹操の綺麗な蒼い瞳は。

……左眼だけ、赤く染まっていた。

「……そ、曹操？」

「……貴方の名前は沙条綾香。沙条家の長女としてこの世に生を受ける。両親を早くに亡くし、今は叔父と二人ぐらし。初恋は……まだ？　十七歳にしては珍しいわね。ええっと……趣味は野草の収集。決して『人間嫌い』では無いけど、人との距離感は巧くつかめない、難儀な性格ね。魔術の種類は……あら？　呪術？　へえ……珍しいわね」

その左眼だけを赤く光らせながら、曹操はにっこり笑う。

冷汗を一筋流す私を、冷たい瞳で見つめながら。

「……あなた……」

「……サーヴァントの真名が秘匿すべきものであるように、魔術師にとって自身の使う魔術は秘匿すべきモノだったかしら？」

……決して、そう言う訳では無い。無いが……

「……なんで知ってるの？」

「知らないわ。『見た』のよ」

……見た？

「ええ。これが私の宝具。『全て見通す紅き瞳』、と言った所かしら？」

……『全て見通す紅き瞳』

「私のこの赤眼にかかれば、サーヴァントの真名から宝具、特殊スキルから歩んできた歴史、弱点まで何でも見通せるわ。どんなに相手が真名を隠そうとしても……私の前では無意味よ」

そう言って、自信満々に笑う曹操。何と言うか……

「……凄い」

そう……この宝具、凄い。

一見すると、この宝具。決して戦闘向きでは無い。

「す、凄いよ！　曹操！　その宝具、本当に凄いよ！」

そう。戦争で最も重要なのは、武力でも、指導力でも、兵士の数でも無い。

情報だ。

この宝具、情報戦と言う見地から言えば、圧勝。なんせ、相手を見ただけで真名から宝具から何でも分かるんだ。

「……本当に……勝てるかも」

俄然、やる気が出てきた。聖杯に根源に至る方法を教えて貰う……なんてのはチート臭いからイヤだけど、叶えて欲しい願い事は沢山ある。お金だって欲しいし、格好いい彼氏だって見つけたいし、学校の成績だってもう少し上げたい。そんな俗っぽい願いを聖杯にお願いするのはどうかとも思うが……まあ、それは後でゆっくり考えればいい。

「曹操！」

「なに？」

「聖杯戦争！　頑張ろうね！」

満面の笑みで、手を差し出す私に一瞬あっけに取られた顔をした曹操だが、

「……こちらこそ宜しくね、綾香」

そう言って、笑顔で曹操は私の手を握り返してくれた。

第二話

「うううう……さ、寒い……」

「あら、情けないわね？　これぐらいの寒さで」

曹操と二人、夜の街を歩く。いや、別に散歩じゃないのよ？

『戦争に参加するなら、街中の探索は必須でしょ？』

らしい。まあ、その考えは非常に共感できる。共感できるのだが……

「……ちょっと曹操。行儀悪いわよ？」

「『ハンバーガー』は歩きながら食べてもいいものなのでしょ？」

曹操さん、駅前で某ピエロのハンバーガー屋さんを見つけると、眼を輝かせながら『綾香！　アレを食べましょう』なんていいやがりました。

ハンバーガーを所望する英霊って……どうよ、それ？

ああ！　ほっぺにケチャップついてるわよ！

「もう！　曹操、女の子なんだから身だしなみに気をつけなさいよ」

ハンカチを取り出し、曹操のほっぺたを拭う。なんだ、この子。

さっきまでは怖い雰囲気だったのに、今は『おのぼり』さんみたいになってる。

「……貴方、本当に探索をする気で来たの？　観光じゃ無くて？」

「もぐもぐ……失礼ね。ちゃんと探索もしてるわよ」

……ハンバーガーをもぐつきながらそんな事言っても、全然説得力が無いんですけど……

「あ！　見て、綾香。噴水よ！」

公園の中心にある噴水を見つけ、眼を輝かせる曹操。本当に……なんだ、この子。

「……貴方、本当に本物の曹操？」

「どういう意味かしら？」

噴水に片足をつけて（この寒いのに良くやるよ、ホント）ニコニコ笑顔を浮かべる曹操。

……溜息も漏れるわよ。

「だって……曹操が女の子だったのも驚きだけど、ハンバーガーが食べたいって……本当はそこらの女子高生じゃ無いの？」

「そんな訳無いでしょ？　第一、『パス』は繋がってるのでしょ？」

「いや、それは分かってるんだけど……」

私だって、本当に女子高生を召喚したなんて思って無い（と言うか、女子高生を召喚してたらえらい事だ）が……

「興味があったのよ。ハンバーガーに」

「……ハンバーガーに？」

「ええ。正確には『ハンバーグ』にだけど……美味しいって聞いていたから」

「聞いてた？」

一瞬、曹操の顔が歪む。

つい、口を滑らせてしまった様な、微妙に照れ臭さそうな、それでいてはにかんでいる様な……そして……悲しみをこらえる様な。

「……私の、大事な人に」

「……」

そんな曹操の顔を見て……それ以上は、何も聞けなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……」

言うつもりは無かったのに、つい口が滑ってしまった。綾香の顔が微妙に引きつってるわ。

……こんなに簡単に顔に出るんじゃ、人の上に立つ者として失格ね。

「……それより綾香」

食べかけの『ハンバーガー』を口の中に押し込み、私は言葉を放つ。

「貴方の『呪術』について、教えてくれる？　彼我の戦力を理解するのは戦術の基本でしょ？」

……これは、嘘。

正直、私はこの『聖杯戦争』なんてもの、やる気の欠片も無い。

だからこれは、話を避けるためのただの方便。

「あ、えっと……呪術ってのはね……と、その前に曹操、貴方は『魔術』ってわかるの？」

「ええ。一通りは理解しているつもりよ」

綾香の言葉に首肯。

召喚される瞬間、聖杯戦争についての知識や、こちらの世界の情報なんかは一通り聖杯自身から教えて貰った。

『聖杯』という、万物の願いを叶える事の出来る杯を奪い合う戦争である事。

自身が『サーヴァント』と言う名の『英霊』として召喚される事。

そして、その召喚した『マスター』に従い、この戦争を勝ち抜く事。

……まあ、教えて貰ったと言っても、無理矢理頭の中に流れてきた感じだ。知識の押し売りみたいなやり方には正直腹が立ったのだけれど。

「……うーん……それじゃ、『魔法』は？」

「魔法？　魔術と何か違うのかしら？」

正直、魔法も魔術も呪術も私にとってはどれも同じに思えるのだけど？

「えっと……どう説明すればいいかな……例えば曹操、貴方は空が飛べる？」

「飛べるわけないでしょ？　私は人間よ？」

「人間っていうか英霊だけど……まあ、魔術師ってのは空を飛べる人もいるのよ、魔術で」

「ええ」

「でも……今のこの世界って、別に魔術を使わなくても空が飛べるのよ、人間は。飛行機とかヘリコプターを使って」

飛行機とかヘリコプターと言われてもピンとこないんだけど……なに、それ？

「要は、その結果をもたらす為の『手段』の話。その手段の一つが魔術。どの方法を用いても至れない領域が魔法って事」

「……」

分かった様な、分からないような。

「……例えばその噴水。水を噴き出してるでしょ？」

「ええ」

「それは、地下にある水をくみ上げて噴射してるんだけど、魔術でも同じ事が可能なのよ」

「……ああ。そう言う事」

なるほど。

「分かったの？」

「今の『科学』を置き去りにしているのが魔法、今の『科学』の範疇が魔術と言う事でしょ？」

私の言葉に綾香が眼を丸くして驚いている。

「違ったかしら？」

「……ううん。正解。まさか曹操の口から『科学』なんて出てくると思わなかったから」

「ああ、だからあんなややこしい説明をしたの？」

「……まあね」

肩をすくめて見せる綾香。それは申し訳なかったわね。

「とにかく、魔術ってのはそういう物。神秘に至る為の、中途半端な神秘。それが魔術。ぶっちぎりで超越してるのが、魔法」

「呪術は？」

「説明が難しいんだけど……その中間って所かしら？」

中間？

「今の科学で出来るか、出来ないかが魔術と魔法の境目なんでしょ？　中間なんて存在しえないのではないかしら？」

「ううん……」

少し中空を見つめ、考え込む綾香。

「例えば曹操……貴方、『雨乞い』って知ってる？」

「知ってるわよ」

「呪術は、類感呪術と感染呪術に分けれるの」

「類感呪術と感染呪術？」

「大別すると、だけど。さっきの雨乞いなんかは類感呪術、自然現象の模倣を行う事によって『結果』を導き出そうとするの」

「……」

「雨乞いなら『水をまく』という行為で『雨』という自然現象を模倣する。その模倣により、雨を呼び寄せるの」

「……それは」

……何と言うか……

「かなーり、微妙でしょ？」

「……ええ」

「呪術がメジャーにならない理由はソコ。果たして、本当にその『原因』が『結果』に結び付いたか、判別が出来ないの。水をまいたから雨が降ったのか、元々雨雲が近くにあったから雨が降ったのか、

もっと別の魔術や魔法で雨を降らしたのか、そのあたりの区別がものの凄く曖昧なのよ」

はーっと溜息をつく綾香。

……溜息をつきたいのは私だ。

「つまり……こういう事かしら？　貴方の『呪術』は、それを使ったとしても思うどおりの効果が得られるかどうか、得られたしても、それが貴方の呪術のお陰かどうか、それすら分からないって事かしら？」

「まあ、そういう事ね」

「……」

「……」

「……短い付き合いだったわね、綾香」

「ちょ、な、何でよ！」

……何でよ、ですって？

「当たり前でしょ？　貴方、そんな使い物にならない様な『武器』で戦おうと言うの？」

バカにするのもいい加減にしてくれるかしら？　大事な時に使い

物になるかどうか分からない味方なんて、敵よりも厄介よ。
別に勝ちたい訳ではないけど、むざむざ負けが分かって戦うなんていうのは御免よ！
「お、落ち着いてよ曹操。呪術は二つに大別出来るって言ったでしょ？」
「……ええ、言っていたわね」
「感染呪術の方は大丈夫！　だから……って、に、睨むの辞めてよ！　怖いじゃない！」
……睨まないから言ってみなさい。何よ？　感染呪術って。
「感染呪術ってのは、接触の原理に基づく呪術よ」
「接触？」
「例えば、相手の髪の毛とか、爪なんかの体の一部、或いはその人の持ち物や……究極、対象相手が座った椅子なんかでも構わないわ。とにかく、なにかを媒介して相手に効果を与えるのが感染呪術よ」
「……綾香」
「なに？」
「人を呪わば穴二つ、っていう言葉、知ってるかしら？」
「あ、それは呪術師が一番最初に習う言葉よ」

「……」

「……」

「……短い付き合いだったわね、綾香」

「何でよ！」

「当然でしょ！　貴方、それはただの『呪い』でしょ！」

「ええ、そうよ！　私は『呪』術師だもん！」

「私は曹孟徳！　覇道を歩んだ誇り高き王よ！　その私を召喚したのが、婉曲な嫌がらせみたいなモノでしか戦う術を持たない呪術師ですって！　許せる訳無いでしょ、そんなの！」

そう、私は曹孟徳なのだ。

そんな、後ろから不意打ちをする様な戦い方、私の趣味じゃない。やるなら、正々堂々。それが私の誇りであり、矜持。

「他の魔術を使いなさい！」

「他の魔術？　元素魔術の事？」

「なんの魔術か知らないけど、とにかく呪術以外の魔術よ！」

「イヤよ！」

「なぜ！」

「科学で出来る事を、わざわざ手間暇かけて魔術でやるのよ？　元素魔術なんて、頭の悪い魔術じゃない！」

「頭の悪い魔術って……呪術は性格の悪い魔術みたいだけどね！」

「っぐ！　……い、いいもん！　呪術は、最も神秘に近い魔術！根源に至る為には呪術以外有り得ないのよ！」

根源に至る為には呪術以外にって……

……。

……。

……。

「……ねえ？」

「なによ！」

「『根源』って……なに？」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「『根源』って……なに？」

今まで喧々囂々言い合っていた私だが、曹操の言葉で頭に上った血が下りてきた。

「『根源』っていうのは……全ての原因、あらゆるものが流れ出したモトよ」

「……全ての原因？」

「有体に言うと……『真理』とか『森羅万象』とかかしら？」

全ての事象には二つのモノがある。『原因』と『結果』。結果があるから原因があるし、原因が無いと、結果など有り得ない。だから、『因果』と言うのだ。

根源が『全ての原因』ならば、それはすなわち、『全ての結果』と同義。つまり、根源に至る、という意味は世界の全てを知る事だ。

根源に至る事こそが……魔術師がその生涯のみならず、その子孫にまで受け継がせる唯一にして最大の研究テーマ。

「科学で出来る事を、魔術で代用した所で……そんなもので、根源に至れると思う？」

具体的にどうやって魔術を使って根源に至るかなんて分からない。っていうより、それが簡単に分かるんだったら、魔術師が子孫に残す程の命題になる訳が無い。

「……呪術なら、根源に至れるのかしら？」

「それは！　……分からないけど……」

でも……少なくとも、魔術よりはその階段は近いと……そう、思う。

科学では、絶対に辿り着けない領域。『結果』に必ずしも結び付くかどうか分からない、そんな呪術だからこそ、神秘により近いんだと……そう思う。

「……だから……私は、呪術を使うわ」

それが……私の、連綿と受け継がれる、沙条家の誇り。

「……そう」

曹操の表情からは何も読み取れない。

誇り高い彼女の事だ。

ひょっとしたら……愛想を尽かされるかもしれない。

だから……

「……分かったわ。貴方の誇りを汚した事は詫びるわ」

そう言って曹操が頭を下げた時は、とてもびっくりした。

「そ、曹操？」

「良く知りもしないで、貴方の呪術を侮辱した事については非礼を詫びる、と言ったの」

「い、いいわよ……べ、別に」

「ただ……もし貴方が、貴方の言う『頭の悪い魔術』を使えるのならば、それも戦術の一端に入れておいてくれるかしら？　そちらは確実に発動するのでしょ？」

「え、ええ。わかったわ」

「そう。それならこの話はおしまいね」

そう言ってにこりと微笑み、曹操が噴水を後にする。その姿を私は慌てて追った。

「……それにしても」

どれほど、無言で歩いただろう？　不意に曹操が口を開いた。

「なに？」

「『根源』に至ると言うのは、そんなに難しい事なのかしら？　それとも、魔術師と言うのは総じて頭の回転が鈍いのかしら？」

まるで、『明日の晩御飯は何かしら？』と聞いているかのごとく、簡単に毒を吐いてくれちゃう金髪ガール。

「……アンタね……そんなの、『時計塔』で言ってみなさいよ？ぶっ飛ばされるわよ」

「時計塔？」

「頭の回転が鈍い奴らの巣窟よ」

いや、あれは魔窟か？

「だって……根源と言うのは『森羅万象』の全て、と言う事でしょ？」

「そうよ」

「言い換えれば、『世界の始まり』と言う事よね？」

「ええ」

「なら……簡単じゃ無い」

そうね。森羅万象の全てで世界の始まりよ。それならかんた――

……。

……。

……え？

「えええええーーーー！」

「うるさいわ、綾香」

「ごめ……じゃなくて！　そ、それ！　曹操、貴方分かるの？　根源が、根源への至り方が！」

「根源と言うのが世界の始まり、或いは『始まりの場所』ということなら、大体の見当はつくわ」

……マジですか？　英霊、何でもありですか？

「な、なんで分かるのよ！　それもサーヴァントの力？」

「そんな訳無いでしょ？　少し頭を巡らせれば分かるわ」

「……嘘でしょ……」

そんなの……有り得ない。

と、言うか……酷い。

こんなに簡単に『根源』に至れるなら……私達魔術師の苦労は何だったんだろう……

「お、教えて！　曹操、根源への至り方、教えてよ！」

私の言葉に、曹操が訝しげな顔を向ける。でも、構わない！

『聖杯に根源への至り方を教えて貰うなんて、チートだ』なんて言っていたが……チートでもなんでもいい。眼の前に『根源』への至り方を知っている者が居れば、魔術師なら力ずくでも口を割らそうとするだろう。

「私の解釈よ？　もしかしたら、全く見当違いの事を言っているかもしれないし、貴方が聞いても意味が無いかも知れないわ？」

「聞き様によるわよ！」

魔術師なら、冗談でも『根源の至り方を見つけた』なんて言う訳無いし、仮に見つけたとしても、決して口に出さず秘匿するはずだ。曹操の言ってる事が正しいかどうかは別として、参考には絶対なる。

「……そうね。それじゃ、言うわよ。私の『根源』の解釈は……」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

本当に……『魔術師』という人種は、なんでこんな事を真剣に悩むんだろう？

綾香の説明によれば、『根源』と言うのは、全ての原因と結果、つまり、『世界』の生まれる場所の事なんでしょ？

なら……根源と言うのは、たった一つしか有り得ないんじゃないの？

「……そうね。それじゃ、言うわよ。私の『根源』の解釈は……」

そこまで喋って。

私は歩みを止めて口を閉じた。

「曹操？　じらさないで教えてよ！」

綾香の言葉は右耳に入り、左耳に抜けた。

「……綾香」

「なに？」

「ココは……何？」

「ココって……ああ」

綾香も、私が見つめるソレに気付いた様だ。今まで見てきた建造物の中でも大型のソレ。

「ここ、私の通ってる学校よ」

「……学校……」

『……そうだな。平和になったら、学校でも作ってみるか？』

『学校？　なんなの、それ？』

『学校っていうのは……同じ年ぐらいの男女が集まって、先生の下で勉強したり、部活……運動したり、遊んだり、喋ったりする所だ』

『……へえ』

『勉強なんて面倒くさいと思ってたけど、今にして思えば楽しかったな、学校』

『そうなの？』

『ああ。だから、平和になったら学校を作ろう。皆で色んな勉強して……それで、大陸がドンドン発展していくんだ。いいだろ？』

『……ええ。素敵な提案ね』

『だろ？』

『……それなら尚の事、早急に三国を統一しないといけないわね？　むしろ、その後の方が貴方の天の国の知識が生きてくるんだから。責任重大よ』

『うへ。ま、華琳がそう言うなら頑張ってみるかな』

『ふふふ。期待してるわよ――』

「……う……そう……？」

「……」

「曹操？」

綾香の言葉に、意識が現実に戻る。

「……何かしら？」

「何かしら？　じゃ、無いわよ。どうしたの？　急にぼーっとしちゃって」

「……何でも無いわ」

……そう。何でも……何でも、無い。

「……折角だから、綾香。学校を案内してくれないかしら？」

「学校を案内って……そんな事より、根源！　根源の至り方！」

「学校を案内してくれるのが先よ」

あいつが……『一刀』が、楽しそうに語っていた学校という場所。

一刀と一緒に学校を作ると言うのは、私が思い描いた、夢にまで見た『場所』

「案内してくれないと、教えないわ」

「っぐ！　足元を見て……分かったわよ！」

しぶしぶ、と言った感じで綾香が学校の門をくぐる。

「……これが、学校……」

まず、思ったより大きい。

「……大きいわね」

「……そうね。生徒数も多いから、この辺りでは大きい学校かな？」

「……」

こんな大きな学校、魏ではちょっと無理だったかも知れないわね。

そんな風な事を考えながら、教室を始め、理科室、家庭科室、美術室などの教室を見て回る。

……ますます、魏じゃ無理ね。こんな設備。

「……もういい？」

半刻程見て回った頃だろうか？

若干、うんざりした顔をした綾香がそう問いかけてくる。

「……ええ。興味深かったわ」

もう、私に『あの夢』を叶える『時間』は残されていない。だから、この『場所』を見て回った事自体に、視察の意味など無い。

「……ありがとう、綾香」

「へ？　な、なにが？」

頭に疑問符を浮かべる綾香に微笑みを浮かべる。

ありがとう。私の『夢』を一つ、叶えてくれて。

この『学校』を見れただけでも、私はこの世界に召喚された意味があ――

不意に感じたのは、空気が凍る様な感覚。

「綾香！」

「な、なに！」

「外！　校庭の方よ！」

綾香に声をかけ、私は校内を走り抜ける。

三階の廊下を走り降り、一階の下駄箱を駆け抜け、一路校庭へ。

「……」

校庭で繰り広げられる光景に、思わず眼を奪われる。

赤と、青の、影が。

まるで、踊る様に、詠う様に、繰り広げられる光景。

赤が攻めれば青が守り。

青が攻めれば赤が防ぎ。

一瞬でお互いの立ち位置が入れ替わり、瞬きする間にはまた元の位置へ。

決められた、舞踊の様に。

「ちょ、ちょっと曹操、どうした――」

隣で、綾香が息を飲むのが見てとれた。

「……綾香」

「……な……に……」

かすれた声を出す綾香に。

「……あれが……サーヴァントの戦いよ」

第三話

幼いころから、魔術師として生きて来た。

この世の常識では考えられない、『世界の裏側』

そんな物を小さい頃から、ずっと見続けてきた。

自分の真横で、人間が吹き飛ぶ姿を見た事がある。

脳漿をまき散らせながら、それでもペンを握り続けた魔術師を見たこともある。

狂気と狂喜の果てに、精神を崩壊させた魔術師を見た事がある。

空を歩く人間を、水に潜り続ける人間を、火の上を歩く人間を見た事がある。

そう。この世で起こる、殆どの不思議な現象なんて、見尽くしてきたと思った。思っていた。

……だが。

……私は、まだまだ甘かった。

「綾香！」

曹操の声に自分の足元が木の枝を踏みつけていた事を知る。

パキっと。本当に小さな音がした。

あんな遠くにいる人間に聞こえるはずもない、小さな、小さな音がした。

「誰だ！」

爛爛と、青い方の眼が輝いているのを見て。

サーヴァントの異常さを。

サーヴァントの常識外れさを。

サーヴァントの強さを。

そして……サーヴァントの怖さを。

私は知る事になる。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ちっ、と。はしたなくも、思わず舌打ちが漏れる。

「走るわよ、綾香！」

声と同時に手を掴み、綾香を連れて今来た道、つまり校舎内へひた走る。

「ちょ、曹操！　あ、あれ！」

「死にたくなかったら黙って走る！」

喋ると同時に、『全て見通す紅き瞳』を発動。青のサーヴァントに視線を走らす。

……まずい、わね。

「ちょ、曹操！　どうしたの、真っ青な顔して！」

……人の心配をしている場合じゃないでしょ？　貴方の顔色の方が大変な事になってるわよ？

「一回しか言わないから良く聞くのよ。あの青のサーヴァント、クラスはランサー、名前はクー・フーリン」

「クー・フーリン？」

「そう。ケルト神話の英雄、クランの猛犬、アイルランドの光の御子。影の国の女王より『ゲイボルグ』を授かったと言われる半神半人の大英雄」

……勝ち目は……薄そうね。

「……弱点……弱点は！　弱点は無いの！」

「……犬の肉を食べない、自分より身分の低い人間の食事は断らない、詩人の言葉には逆らわない」

「……なにそれ？」

「ゲッシュと呼ばれる、一種の願掛け。まあ、あそこまで強力なものになると既に『呪い』ね。貴方、得意でしょ？　そういう後ろ向きな魔術」

軽口を叩く余裕も無いのに。

否、軽口を叩いていないと、余裕を保つ事が難しいから。

そう思って、廊下の角を曲がった所で。

「……よう。遅かったな、待ってたぜ？」

件のランサーが、槍を構えて待っていた。

にやりと……にやりと、口の端を歪めて。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……よう。遅かったな、待ってたぜ？」

薄暗い月明かりの中でも、映える蒼の鎧。

それに反比例する様な、真っ赤な槍。

口の端に浮かべた笑いが……何とも、嫌らしい。

「……あら？　誰が待っていて欲しいと頼んだのかしら？」

「……ツレねえな、嬢ちゃん。そんな事言うなよ？　折角のデート誘いだぜ？」

芝居がかった様子で、両手を広げ、更に先ほどよりも笑みを濃くするランサー。

「……とんだ女好きの英雄さまね」

曹操も、ランサーと同じ様に両手を軽く広げ、肩をすくめて見せる。海外ドラマなんかでは良く見る風景。

……まあ、こんなに殺伐としたものではないけど。

「男が女好きじゃ無かったら、この世は滅びるぞ？」

「……否定はしないわ。私の良く知ってる人にもいたもの」
「女好きが、か？」
「ええ。『種馬』と呼ばれていたわ」
「ははは！　『種馬』か！　そりゃ、良いな」
「ええ。最も、その人自身は『種馬』なんて言われ方は嫌だったみたいだけど」
「ははは！　だろうな。俺だってイヤだぜ、それは」
「あら、そうなの？　貴方は気にしないのかと思ってたわ」

『狗』と呼ばれるよりは……マシでしょ？　と。

曹操がそう言った瞬間、ランサーの眼の色が変わった。
「……てめえ……」
「その槍も、影の国の女王さまから頂いたんでしょ？　確か……スカアハ、だったかしら？　流石、女好きの英霊さまね？」
「てめえ！　何者だ！　なんでそんな事まで知ってやがる！」
「知ってるんじゃないわ。『視た』のよ。貴方の生き様、貴方の思

想、貴方の歩んだ歴史……その、全てをね、『クー・フーリン』」

にやり、と。

今度は、曹操の笑みが邪悪に歪む。

先ほどのランサーよりも……もっと、もっと邪悪に。

「その槍についても、ね。『刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルグ）』、因果逆転の呪いによって、相手の心臓を内部から破壊する、対人宝具なら究極に近い宝具ね」

怖い、怖い、と、両の腕で自身の体を抱くように震えて見せる曹操。しかし、その顔には先ほどの笑みが張り付いたまま。

「……お前、何のサーヴァントだ？」

「ふふふ。当てて御覧なさい？　『私達』は戦いで相手を知る。そういうものでしょ？」

そう言って、曹操が死神の所有物にも似た鎌、『絶』を現界させる。

「……違いねえ」

笑みを一層濃くし、ランサーのサーヴァントが槍を構え――

キィーン、と。

乾いた音が廊下に木霊した。

「曹操！」

ランサーの、獣の様な一撃が、曹操の心臓目掛けて放たれる。

その一撃は、必殺にして、必中。寸分違わず急所に命中しようとした槍を、曹操の絶が弾き飛ばす。

「……危ないわね。『早い』のは、嫌われるわよ？」

「っち！」

二度、三度と。

十度、二十度と。

繰り広げられる『槍』と『鎌』の打ち合い。

神速、と呼んでも言い過ぎでは無い、ランサーの槍術。

弾丸の様に。

或いは、流れ星の様に。

その一つ一つを、しっかり打ち落とす曹操の『絶』

「……ふん」

何度目の打ち合いの後だろうか？

構えたゲイボルグを下げ、ランサーがつまらなそうに鼻を鳴らす。

「……お前、一体何のサーヴァントなんだ？」

「あら？　どういう意味かしら？」

降ろしたゲイボルグを杖代わり。

その上に顎を乗せ、曹操に胡乱な眼を向ける。

「ランサーが俺、アーチャーがさっきの紅いのだったら……残る席は五つだ。だが、お前は……キャスターにしては、魔力が弱い。バーサーカーにしては、狂って無い」

「アサシンや、ライダーかも知れないわよ？」

「俺の……『クランの猛犬』の槍を、アサシンやライダー如きで防げるか」

聞き様に取っては自信とも、過信とも、或いは慢心とも取れるランサーの発言。

だが、それはその何れでも無く。

唯の事実の確認。

「……そう。それなら、私はセイバーなのでしょう」

「セイバーにしては……弱すぎる」

それも、唯の確認。

事実、曹操の『絶』はランサーの槍を事如く防ぐも、ただの一度も攻勢に転じる事は無い。

否、出来ない。

「……ふふふ。私の事を『弱い』なんて……」

それでも……曹操は笑っていた。

最優と、剣の使い手である筈の、『セイバー』のサーヴァントが。

弱いと言われて、ただ、『嗤っ』ていた。

「……そうね。確かに貴方に比べたら、私自身の力は『弱い』のかも知れないわ」

「……ほう」

そう言って、曹操は自身の手にある『絶』を消した。

……『絶』を、消した？

「いいわ。それなら見せて上げる。私の、真の『剣』を」

そう言った曹操の眼が、紅く輝いていた。

左眼では無く……その、右眼が。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

確かに……神話の世界の英雄であるランサーの力は想像以上だった。

私だって、剣や槍、或いはこの『絶』の取り扱いには充分精通しているつもりだし、そこら辺の武将辺りなら、遅れを取るつもりは無い。

そんな私でも……このランサーの力は、異常。

格が。レベルが。次元が。

一段も、二段も……上。

「いいわ。それなら見せて上げる。私の……真の『剣』を」

手に握った絶を消し去り、ランサーに視線を向ける。

想像するのは、『扉』。

こちらとあちらを結ぶ、黄泉の門。入口と出口。生と死。なんでもいい。要は、その扉をこじ開けるイメージ。

「……何だ、その『紅い眼』は」

私の、右眼の『紅』に気付き、ランサーが槍を構える。

だが。

もう……遅い。

「来なさい、『春蘭』」

「はい！　華琳さま！」

私の呼びかけに、『魏武の大剣』が。

この世界に舞い降りた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

幼いころから、魔術師として生きて来た。

この世の常識では考えられない、『世界の裏側』

そんな物を小さい頃から、ずっと見続けてきた。

自分の真横で、人間が吹き飛ぶ姿を見た事がある。

脳漿をまき散らせながら、それでもペンを握り続けた魔術師を見たこともある。

狂気と狂喜の果てに、精神を崩壊させた魔術師を見た事がある。

空を歩く人間を、水に潜り続ける人間を、火の上を歩く人間を見た事がある。

そう。この世で起こる、殆どの不思議な現象なんて、見尽くして

きたと思った。思っていた。

……だが。

……私は、まだまだ甘かった。

「てめえ！　なんだ『これ』は！」

ランサーが、構えた槍で必死の防戦を行いながら曹操を睨みつけるように言葉を放つ。

「どう？　私の『剣』の切れ味は？」

言われた曹操は、にこやかに……本当ににこやかに、ランサーに笑いかける。

「どう？　じゃねえ！　何だコイツは！」

「さっきも言ったでしょう？　私の『剣』よ」

「ふざけるな！」

そう言いながらも、急に現れた女性の剣を必死に受け止めるランサー。

……そう、女性。

片目を眼帯で隠し、チャイナドレスを身にまとった、黒髪ロングの妙齢の美女。

その美女が、大振りの剣を手にランサーに斬りかかっていた。

あのランサーに、だ。

セイバーの、最優と言われたサーヴァントである曹操ですら、受ける事で精一杯。斬りかかるどころか、攻勢に転じる隙を見つける事すら叶わなかった、あのランサーに。

「……なんなの、これ？」

「さっきも言ったでしょ？　あの子は私の『剣』」

……意味が分からないんですけど。

「……私は魏王、曹孟徳よ」

「……知ってるけど」

「私は王。王は、自身で戦う事も……勿論重要な仕事だけど、もっと重要な事があるわ。人の上に立つ者が、避けては通れない、その一事」

人材の運用。

「貴方も聞いた事ぐらいはあるのではないかしら？　『魏武の大剣』、夏候惇の名前ぐらいは」

夏候惇元譲。

曹操配下の中では、最古参の一人にして、流れ矢が当たった眼を持って、『父と母から貰ったこの体、捨てる所など無い！』と言って自ら咀嚼したと言う、魏で最も高名な武将。

車への同乗、寝室への自由な出入り等、臣下でありながら臣下として扱わない、いわゆる『不臣の礼』を持って接したと言われる、魏の武将。

「……知ってるけど」

聞いて無いぞ、女の子だったなんて！

「私の剣は、私の盾は、私の頭脳は、私の手足は、私以外にある」

だから、と。

「私自身は『弱く』ても、全然構わない。私以外の私の剣が、盾が、頭脳が、私の代わりに戦ってくれるから」

ランサーの様に、速くは無い。

アーチャーの様に、遠距離攻撃が出来る訳ではない。

バーサーカーの様に、狂って理性の箍を外していない。
アサシンの様に、隠密行動に長けていない。
ライダーの様に、騎乗スキルがある訳ではない。
キャスターの様に、魔術に精通している訳では無い。

「ランサーと違って、私は何の特殊な能力も無い、唯の人間。神の血も引いて無いし、そもそも神話にすらなっていないわ」

「……」

「サーヴァントが軒並みランサークラスの英雄だとしたら……恐らく、『私自身』は最弱のサーヴァントでしょう」

『最優』と呼ばれたセイバーのサーヴァントが、『最弱』

「でも……」

『私』は……『最強』よ？

そう言って笑う曹操は、正に王者の風格。

『最強』の名こそ、彼女に相応しい。

そう……そう、思わせてくれる様な、そんな笑顔で……

「ふざけるな！」

三度、ランサーの怒号が学校の廊下に響く。

「お前、サーヴァントとしてこの世に現界したんだろうが！　それなら、自分の手で、自分の足で、自分の頭脳で、自分の体で戦え！　それでも剣士か！」

「残念ね。私は剣士では無く、唯の『王』よ？」

「てめえ！」

「華琳さまの手など煩わせる必要など無い！」

ランサーの発言に、夏候惇が鋭く剣戟を打ちつける。

「っち！」

「ほらほらどうした！　偉そうなのは口だけか！」

「……貴様」

とん、とランサーが後ろに大きく飛び、夏候惇と距離を取り。

「……ならば、受けてみろ。俺の必殺の一撃を」

ランサーが構えを低くし、槍を構える。

その姿は……正に獣。

夏候惇も、流石武人。

そのランサーの変化にいち早く対応。自身の持つ剣を構え直し、こちらも態勢を低くする。

空気が……学校に流れる空気が張り詰める。

一瞬の瞬きすら。

その一事すら、自身の存在を消しかねない程の、重たい空気。

……喉が。

……喉が酷く、渇く。

「……ふん」

その空気が。

ランサーの鳴らした鼻により、その空気が一瞬で弛緩する。

「おい、セイバーのサーヴァント」

「なにかしら？」

「良い所だが……うちのマスターが帰って来いって言ってるんでな。悪いがこの辺で手仕舞いにさせて貰うぜ」

「あら、逃げるの？」

「はん！　何とでもいいやがれ」

「簡単に逃がすとでも？」

「ついて来たかったらついて来ても良いぜ？」

俺について来れるんだったらな、と。

その一言と、人を喰った様な笑みを残して、ランサーはその姿を消した。

「追いますか、華琳さま」

「……いいわ、春蘭。ご苦労様」

「……いえ」

そう言って、眼を伏せる夏候惇。曹操は『春蘭』って呼んでるけど……まあ、あだ名か何かなのだろう。

夏候惇の唇は、固く固く結ばれていた。

恐らく……悔しいのだろう。

武人として、曹操第一の臣下として、『魏武の大剣』として。

自身の王に、仇をなした敵を討ち取れなかった……その、悔しさを。

噛みしめるように、唇を一文字に結ぶ、その姿。

その姿を見て。

そんな、自分の命を救ってくれた夏候惇の姿を眼に焼き付け、何か言葉をかけようと口を開きかけ――――

「……か」

「何かしら？」

「華琳さまぁぁぁぁーーーー！」

――――開きかけた口を、閉じました。

「華琳さまぁ～。寂しかったですぅ！」
「嬉しい事を言ってくれるわね、春蘭。私もよ？」
「ああ……華琳さまぁ」
……先ほど、私達を救ってくれた魏武の大剣が。
曹操の胸で『ごろにゃん』してます。
「……」
「華琳さまぁ～」
「ふふふ。可愛い子ね、春蘭」
「春蘭、一杯頑張りました！」
「そうね。いい子ね、春蘭」
「ああ……」
嬉しそうに。
本当に嬉しそうに、眼を細め曹操の胸で気持ち良さそうに喉を鳴

らすにゃこうとん……じゃなくて、夏候惇。

「……え、ええっと」

「あら、綾香。居たの？」

……居たのって。

「居たわよ！　ずっと見てたわよ！　って言うか、何よ、ソレ！」

「ソレ、とは何かしら？」

何かしらって……いやね、曹操さん。貴方の胸でひたすら甘えまくって、くんかくんか匂いを嗅いでる美女が、先ほどまでランサー相手に優勢に戦いを進めてた人と同一人物とは、とても思えないんですけど！

「こちらの世界では……そうね、『ぎゃっぷ萌え』というのでしょ？」

ギャップ萌えはそう言う意味じゃない！　いや、細かい意味はよく知らんけど、取りあえず今の夏候惇の姿は『萌え』じゃなくて『ドン引き』だわ！　って言うか、どこで覚えたそんな言葉！

「聖杯が教えてくれたわ」

聖杯ぃぃぃぃぃー！　もっとちゃんとした事教えろ、コラ！

「先ほどから……なんだ、お前は？」

私と曹操の漫才……じゃなくて、コント……でも無くて、とにかく話を聞いていた夏候惇が、私に鋭い眼差しを向ける。その瞳に思わず回れ右をして逃げ出したくなるが、自重。

「わ、私は……沙条綾香！　曹操のマスターよ！」

「……『ますたー』？　華琳さま、『ますたー』とは何ですか？」

「ご主人様の事よ」

「ああ、そうなんですか。あの女は、華琳さまの『ご主人様』なんです――」

……ああ、見せて上げたい。

夏候惇、顎が外れるぐらいに大きく口を開けています。

「か、華琳さま！　ご冗談ですよね！」

「本当の事よ」

「そ、そんな……」

がく、っと廊下に手を付き、項垂れる夏候惇。ふ、ふん！　分かったか！　アンタが華琳さま、華琳さま……華琳さまって誰だろう？　と、とにかく、そう言って懐いているのは私のサーヴァントだ！　つまり、

私＞＞曹操＞＞＞＞＞（超えられない壁）＞＞＞夏候惇

と、いう図式が成り立つの！

「……ふ」

「？」

「……ふ、ふふふふ……」

ゆらーりと、不気味な笑い声を上げて夏候惇が立ちあがる。手には、先ほど持っていた剣を握り締めて。

「……分かりました、華琳さま。つまり、私がこの世界に来たのは、あの女を殺せ、というご命令があったから何ですね？」

「ちょ、か、夏候惇！　あ、アンタ何言ってんのよ！」

「……ふふふふ。安心しろ。楽には殺さない」

「逆に安心出来ないでしょ、ソレ！　死ぬなら楽に死ねる方がいいわ！　って言うか曹操！　アンタもニヤニヤ見てないで何とかしなさい！」

「そうね……春蘭、手加減は要らないからね？」

「はい！　華琳さま」

「そ、曹操ーーーー！」

満面の笑みを浮かべた夏候惇が、剣を振り上げて一足飛びに私に向かってくる。

死ぬ間際に、人は走馬灯の様に自分の人生を省みると言うけど……本当だったわ。

ああ……お父さん、もう少ししたら私もそちらに行くからね。小学校三年生の時、『お父さんの靴下と私の服を一緒に洗わないで！』って言ってごめんなさい。今度はちゃんと、親孝行できるように頑張るから――

ぎゅっと眼を瞑り、死を覚悟する私。

でも、いつまで経っても夏候惇の刃は私に振りかかる事は無い。

恐る恐る眼を開けてみると……そこには面白そうに瞳を細める曹操の姿が。

「なにをしているの、綾香？」

「……へ？」

何をしているのって……え？

「か、夏候惇は！」

「もう帰ったわ」

「か、帰った？」

……へ？

「元々、『この世の理』から外れたモノをこちらに召喚するんですもの。そんなに長い時間、召喚し続ける事なんて出来やしないわ。私は、キャスターでは無いのだから」

いや、キャスターだってそんな芸当は出来ないと思うんですけど……

「特に今回はこちらに召喚されたばかりで魔力も少なかったんだから、これぐらいの時間が限界でしょうね」

……まあ、そりゃそうだ。

サーヴァント一体が、そんなにポンポンポンポン夏候惇クラスの英雄を召喚出来るんなら、聖杯戦争なんて有名無実、私が部屋で惰眠を貪っていても、次の日には終わっているだろう。

「……そんなに巧い話は無いか」

「戦闘行為は特に魔力の消費が激しいから。一体が限界だし、そんなに長くは召喚し続けれないわ」

「そうなの？」

「ええ。部屋の掃除や……そうね、料理ぐらいなら半日ぐらいは召喚出来るかも知れないわ」

……三国志の英雄に『おさんどん』をさせろと？

「でも……それじゃ、さっきのランサーとの戦闘中に魔力が切れていたら……」

「……運が良かったわね、綾香」

運が良かったわね、じゃないわよ！

「あのまま私が戦うよりは、勝率の高い選択だった筈よ？」

「まあ、確かにそうだ――」

……。

……。

……ん？

「……ねえ、曹操」

「何かしら？」

「召喚出来る時間って、決まってる訳じゃないのよね？」

「その日の体調と、魔力の量に寄るわね」

「サーヴァントに体調って……でも……それじゃ、さっき夏候惇が斬りかかって来た時、あんなタイミング良く消えるのが分かってた訳じゃないの？」

おそるおそる。

そう聞いた私に、曹操は。

「……だから言ったでしょ？　『運が良かったわね』って」

満面の笑みでそう答えやがりました。

……サーヴァント、怖ぇぇぇ！

第四話

「はー……なんか疲れたわ……」

ソファの上にぐでん～と横になり、足をパタパタさせる私。うん、はしたない。

「ちょっと……綾香？　そんなはしたない恰好をしては駄目よ」

サーヴァントに注意されました。お母さんか、アンタは。

「だって……サーヴァント召喚したその日に、いきなり他の英霊とバトルでしょ？　もう……なんて言うか、すっごく疲れたのよ」

「……だらしないわね、全く」

そんな私をジト目で見やり、椅子の上で足を組み溜息をつく曹操。さすが、覇王。貫録、ありますね！

「おだてても何も出ないわよ。それより綾香、これからどうするか……って、あら？」

リビングに飾ってある花瓶？　壷？　だか何だかに視線をやり、眼を大きく見開く曹操。何よ？

「綾香……これ、どうしたの？」

「ん？　お祖父さまの趣味の一品。確か……それこそ三国志の時代

に使われてたとか何とか言ってたわね」

眉唾ものの話だけど、と手を振る私に、曹操が静かに首を振る。

「……いいえ。これは本物だわ」

「え？　そうなの？　流石、曹操。その時代に生きていただけあるわね～」

「そうね……まさか、もう一度この壷を見る日が来るなんて」

感慨深げに、愛おしげに壷を撫でる曹操。へ？

「……どういう意味？」

「……これ、私が使っていた物なの」

「……へ？」

「正確には……私が使っていたものを、『ああ、華琳さん！　その壷、凄く可愛い！　ちょうだーい』と無理矢理、桃香が持ち帰ったものね」

「……桃香って誰ですか？」

「劉備の事よ」

……マジで？

「ええっと……我が家にある、その古びたばっちい壷は、な、なん

と！　三国志の英雄二人の所有物だった過去がある、某お宝鑑定番組に出品すれば結構な値段が付きそうなもの、という事で宜しいでしょうか？」

「価値があるかどうかはともかく……古いものである事には間違いないわね」

「……はあ……」

「あの子の事だから早々に割って、私に怒られるのが嫌で隠しているのだと思っていたけど……大事にしていてくれていたのね」

先ほどよりも深い情愛を見せ、曹操が壷を撫でる。過去を懐かしむ様なその姿は、非常に絵になるんですが……

「……お祖父様……そんな所に金かける暇があるなら、私へのお年玉を奮発してくれても良かったのに……」

可愛い初孫のお年玉、中学二年生でワンコインってどうよ？

「お祖父さまはご健在なの？」

「私が中三に上がる前に他界したわ」

「そう……これだけ大事に扱ってくれていたのだから、一言お礼を言いたかったのだけど」

「……アンタが出て来てお礼を言ったら、そのショックで他界してかもね」

呪術師の私が、聖杯戦争で最優のサーヴァントを召喚しました、なんて言ったら、間違いなく心臓を止めるわね、あの人。

「……少し聞いても良いかしら？」

「なに？」

「この家、随分大きいけど……ご家族の方はいないの？」

「祖父と祖母は寿命で他界。父はロンドンに魔術の武者修行に行って他界。母は、私を生んだことで体調を崩して、中学校に上がる前に他界」

「……悪い事を聞いたかしら」

「まさか。魔術師として生まれた以上、寿命で死ねるなんて幸福な事だし、魔術師として生まれた以上、寿命で死ねない覚悟ぐらいしてるわ。母も、そんな魔術師の家に嫁いできたんだもん。幸せに死ねるとは思って無かったでしょうし」

「……」

「一応、叔父が私の父親代わりだけど……この家にはいないわ」

「『この家』には？」

「ええ。ココは、沙条家の別邸だから」

「……別邸？」

「本邸はココから三駅ほど向こうの街にあるわ」

「……ひょっとして、沙条家は結構な資産家かしら？」

「……別に資産家って程じゃないけど……まあ、少しはお金持ちかな」

魔術師に……と、言うより『根源』に至る為に本当に必要なモノは、才能でも、努力でも、魔術回路でも、血筋でも、家柄でも無い。

お金だ。

誤解を招きそうでイヤなのだが……魔術というのは実際問題、結構お金がかかる。

高いのだ。何もかも。

宝石魔術なんてその最たるものだが、そうじゃ無くても『使い魔』を飼えばお金はかかるし、竜の鱗だの、人魚の涙だの、一角獣の角の粉末なんかの幻想種が、そんなに安価な訳が無い。

専門書はそれこそコピーなんて出来る代物じゃないから、殆ど写本ばっかり。手間がかかるから当然高額だし……そもそもサラリーマンをしながら根源を目指します！　なんて、滑稽を通り越して、憐れみすら受けかねない。

根源を目指そうとする魔術師は等しく、働かなくても食べて行ける程度の蓄財がないと到底やっていけないのだ。

「……つまり……魔術師という人種は、一人家に籠って、働きもせずに、魔術の研究に打ち込めるモノで無いとなれないと、そういう事？」

「勿論、才能が無いと箸にも棒にもかからないけど……才能溢れる貧乏人と、平凡な大富豪なら、後者の方が根源に至る可能性は高いわね」

「それは……確か、こちらの世界では『ひきおたにーと』というモノじゃなかったかしら？」

「……あながち間違っていないけど、その言い方には一々悪意が感じられるわね。つうか、どこで覚えた『引きオタニート』なんて言葉！」

「聖杯よ？」

聖杯ぃぃぃぃーーー！　お前は本当に何をしているのかと、小一時間問い詰めたい！

「……ま、まあ魔術師談義はこのくらいにして。それよりあのサーヴァントの対策を――」

「……その必要は、ねえぜ？」

窓の桟の所。

両足を乗せ、先ほどの朱槍を肩に担いで。

「……ここで、お前らはリタイアだからよ？」

にやりと。

憎いぐらいに……絵になる笑みを浮かべた、ランサーのサーヴァントがそこにいた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「綾香！　逃げなさい！　ココは私が！」

私の言葉に、呆けた様な顔をしてランサーを見つめていた綾香が弾かれた様に駆けだす。

「ほう？　お嬢ちゃんだけ逃がして、お前は逃げねえのか？」

「あら？　サーヴァントがマスターを逃がすのは当然でしょう？貴方を止めるのは、この私の役目よ」

「はん！　お前如きの腕で、俺を倒すってか？」

「『倒す』なんて言って無いわ。『止める』のよ？」

『絶』を現界させ……可能な限り不敵に見えるよう、笑って見せる。

間合いを伺う様に、時計回りにじりじりと動く。私が右に動けばランサーは左に。

互いの位置が半回転した時。不意にランサーの口が言葉を紡いだ。

「……分かんねえか？　お前じゃ話にならないんだよ。いいから、あのねーちゃんをもう一回出せ」

「春蘭？　そんなに気にいったの？　あの子の事」

「……ああ、気にいったね。あんな強い奴とやりあえるなんて……ゾクゾクするぜ」

舌なめずりをするランサーのサーヴァントに思わず胸中で舌打ちが漏れる。アイルランドの英雄、クー・フーリン。噂に違わぬ戦闘狂だ。

「……それに……外見も結構好みだぜ？」

「……流石、英雄。色を好むわね」

アイツ以上の手の早さね、全く。

「……出してあげたいのは山々だけど、私も魔力切れよ？　あの子を召喚する事なんて出来ないわ」

「……そんな戯言、信じると思うか？」

「信じる、信じないは、貴方の勝手よ。どうしても逢いたいなら、日を改めていらっしゃい。そうしたら……そうね、逢引の段取りぐらいは手伝ってあげるわよ？」

「……」

「……」

「……本当なのか？」

「さあ？　後ろからバッサリ、かも知れないわよ？」

チッと、舌打ちをして構えを解いて脱力するランサー。

「つまんねえ話だな。もう一遍、あのねーちゃんとやりあえると思って来たのによ」

両手でゲイボルグを弄びながら、私の方をじろりと睨むランサー。私を睨まれても困るのだけれどね。

「……どうしても春蘭とやりたいなら……そうね、二日後、もう一度こちらに来なさい。そうしたら思う存分、春蘭とやらせてあげるわ？」

一縷の望みをかけて、ランサーにそう持ちかけてみるも、ランサーはつまらなそうに首を横に振った。

「……そうしたいのはヤマヤマだが、これでも、一応、『サーヴァ

ント』だからな」

そう言って、ゲイボルグを構え直す。

狙いは……私の心臓。

「……なんだ？　もう降参か？」

手の内から『絶』を消し去った私に、ランサーが不可思議な視線を向けるも、私はそれに微笑で返す。

「……貴方の槍は確実に心臓を貫くのでしょう？　それなら、抵抗するだけ無駄じゃないかしら？」

「……ふん。ますますつまんねぇ」

「つまらないついでに、もう一個良いかしら？」

「……何だよ？」

「綾香には『教会』とかいう所に行くように伝えてくれるかしら？『教会』ではサーヴァントを失ったマスターを保護してくれるのでしょう？」

「……俺がアイツを殺すとは思わないのか？」

「それこそ……貴方にとってはつまらない事でしょう？」

「……っち！　本当につまんねぇな！」

忌々しそうにそう呟くランサーを見て、笑みを強くする。

出会って半日程のものだけど……そもそも私が『学校を見たい』なんて言い出さなければこんな事にもなって無かった筈。これで、綾香が死ぬような事があればあんまりと言えばあんまりだ。

学校も……アイツが、平和になったら作りたいと言っていたモノも見れた。

私の『目的』には遠くとも……これはこれで一つの結果だ。受け入れよう。

「私は痛くされるのは好きじゃないわ。ひと思いにお願いね？」

「……ふん」

私の台詞に、本当につまらなそうに鼻を鳴らして、ランサーがその槍を構え直して――

「曹操！」

扉が開いて飛び出してきたのは、綾香だった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「綾香！　逃げなさい！　ココは私が！」

曹操の言葉に、弾かれた様に私は駆けだす。背後で私をかばう様

に立つ曹操に眼もくれず、一路地下室の工房に閉じこもり、震える手で鍵をかける。鍵如き、あのランサーにとっては障害にもなりはしないだろうが……気休めという奴だ。

「……は、ははは」

かすれた声が喉から漏れ、自分が笑っている事に初めて気付く。

「む、無理だよ……曹操、もう夏候惇も召喚出来ないんだよ？　勝てる訳ないじゃん」

いみじくも、それは曹操自身が言った事。

最弱。

でも、『最強』

でも、でも……その『最強』は、『剣』を……自身で振わない『剣』を使う事によって成り立つ、言わば『仮初』の最強。剣の無いセイバーは……唯の『最弱』のサーヴァント。

「だ、だから、私は嫌だったのよ！　聖杯戦争なんて！　勝てる訳、無いじゃない！」

おじさんのせいだ！　おじさんが、無理矢理私をこんな戦いに放りこむから、こんな事になったんだ！

「そ、そうだ！　教会！　教会に逃げ込めば！」

おじさんが言っていた！　サーヴァントを失ったマスターは、教

会に逃げ込む事で戦争終結まで保護される。今から逃げれば――

「……サーヴァントを失えば……？」

それって……どういう事？　サーヴァントを失ってって……それじゃ、曹操は？

「……」

……マスターにとって、サーヴァントは唯の『駒』

それが聖杯戦争のルール。何があっても、『サーヴァント』より優先されるべきは『マスター』

そう。

それがルール。

「そ、曹操も言っていたじゃない」

そうだ。曹操も言ってたじゃないか。

逃げろ、と。

ココは私に任せろ、と。

「そ、その通りにするだけじゃない。だ、だから……大丈夫よ、きっと」

ええ、ええ！　大丈夫よ！　逃げても良いわよ！　だって……だって！　私が行った所で、どうしようもないでしょ！　死体が一個になるか、二個になるか、その違いでしょ！　それなら……曹操には申し訳ないけど――

『幸せだったからって……悔いが無いとは限らないわ』

……思い浮かんだのは、そんな悲しい笑みを浮かべた曹操の顔。

「……」

……出来る訳……

「……出来る訳……あるか！」

出来る訳あるか！　曹操を……自分を守ってくれる、自身のサーヴァント残して逃げるなんて、そんな事出来るか！

身近にあった魔術道具を、これも身近にあった鞄に放り込み、鍵をこじ開け元の部屋に駆け上がり、一階のリビングのドアを開けた。

「曹操！」

部屋に飛び込んだ私の眼に映る光景は、禍々しい紅い槍を、無抵抗な曹操に今にも突き出そうとするランサーの後ろ姿。

「綾香！」

「……ゲイ……」

ランサーの槍が光って見える。間に合う……いや、間に合わす！

鞄の中から目当ての『ソレ』を手に掴む。

「……ボルグ！」

「『影縫』！」

ランサーの朱槍が、曹操の心臓に向かって伸びるその瞬間。

窓から差し込む月光で、床に映ったランサーの『影』に向かって決死のダイビング。

鞄の中から取り出したナイフと共に。

イメージは『布』を針と糸で止めるイメージ。

「っち！」

ランサーの口から舌打ちが漏れる。同時に、曹操に向かって伸びる槍が、一瞬止まる。その姿に、今度は私が舌打ち。

流石、英霊。私の『呪術』じゃ、動きを止めるまでは至らない。

……でも。

「曹操！」

私の言葉に、曹操が思いっきり左に飛び退く。ランサーの槍は、曹操の服を掠め、虚しく空を切った。

「綾香！」

左に飛び退いたそのままの姿勢から、曹操がランサーの脇を抜けて、床にダイビングヘッドをかましている私を庇う様に前に立つ。

「なにしてるのよ！　逃げなさいと言ったでしょ！」

振り返って、射殺さんばかりの眼を私に向ける曹操。

「い、いや、そうだけど……」

「貴方が帰って来たって、死体が一つ増えるだけでしょ！」

……。

……。

……ちょっと待て。

「死体が一個増えるだけって……何よ、それ？」
「貴方が帰って来た所で役に立たないと言う意味よ！」
か、かっちーーん。
「あ、アンタね！　それが助けに来た人間にいう言葉？　まずは、『ありがとう』でしょ！」
「誰が助けてくれって言ったのよ！」
「な！　な、何よ！　大体、貴方何してたのよ！　さっきだって無抵抗にぼけーっと立ちつくして！　さっさっと諦めてた訳じゃないんでしょうね！」
「そ、それは……良いでしょ、別に！」
「本当に諦めてたの？　は、何が『ココは私が！』よ！　特攻精神なんて流行んないわよ、イマドキ！」
「あ、貴方……大体、私に眼もくれず、脱兎のごとく逃げ出した貴方にそんな事言われる筋合いはないわよ！」
「に、逃げた訳じゃないもん！　あ、あれは……戦略的撤退よ！道具を持って帰って来ただけでしょ！」
「は、どうだか。とにかく、一度逃げたのなら、最後まで逃げ切りなさい。帰ってこられても迷惑よ！」
「迷惑って……大体、私の身代わりなんかで死なれたら、私の方が

迷惑よ！　いい！　私の、呪術師『沙条綾香』のサーヴァントとして召喚されたなら、泥水を啜ってでも生き残る覚悟をしなさい！」

そう、声を大にして叫んだ瞬間。

私の左手が、淡く光る。

「……え？」

「あ、貴方、何考えてるのよ！　そんな訳の分からない命令で令呪を使うマスターなんて聞いた事無いわよ！」

「わ、私だって使ったつもりはなかったわよ！」

なんでこんな事で令呪なんか使わないと行けないのよ！　つうか聖杯、今のは命令じゃないわよ！

「あ、貴方……本当に何考えてるのよ！　大体、私はサーヴァントよ！　マスターなら、サーヴァントを見捨ててでも生き残りなさい！」

「出来る訳ないでしょ、そんな事！」

「何故！　貴方はマスターで、魔術師でしょ！　割り切りなさい！」

魔術師は、根源に至る道だけを望む。

それ以外のモノは……余分。

人の……ましてや、サーヴァントの事なんて、考える必要、本当は無いかも知れない。

でも……でもね？

「イヤよ！　絶対……絶対そんな事しない！　二人で生き残るのよ！」

「だから……」

「魔術師として正しくてもね……」

そう。

魔術師としては正しくても。

「『沙条綾香』としては、正しくないのよ！」

そう。

私は……絶対、曹操一人を見捨てて逃げるなんてしない！

「……おい、セイバー」

「……なによ、ランサー」

「……面白い嬢ちゃんだな、お前のマスター」
「そうね……まさか、こんな面白いマスターなんて私も思わなかったわ」

……ええっと……なんでしょ？

「……ねえ、曹操」
「なに？」
「もしかして……私、バカにされてる？」
「もしかしなくてもバカにしてるわ」
「な、なによ、それ！」
「おいおい、漫才はそれぐらいにしてくれよ」

ランサーの言葉。

それが、今の状況を思い出させてくれる。

「……別に漫才しているつもりは無いのだけれど。それと綾香。そろそろ立ちあがったらどう？」

曹操の言葉で、私は床に突っ伏したまんまの姿勢だった事に気付

く。

……。

……。

……。

「……さて」

パンパン、と膝をはたき曹操の横に並び立つ。

その姿、正に威風堂ど――

「仕切り直した所で悪いけど、それでチャラにはならないわよ？」

「……そこは触れないのが優しさでしょ」

「それは申し訳ない事をしたわね？」

楽しそうに笑う曹操に舌打ちが漏れるわよ、ちくしょう。

「取りあえず曹操」

「……」

「曹操？」

「……華琳、よ」

「……は？」

「私の真名は華琳。これからはそう呼んでくれる？」

「え、ええっと……え？」

「だから、華琳、よ。私の真名、貴方に預けるわ」

「……えっと……ありがとう？」

「どういたしまして」

「でも……何で急に？」

「……触れないのが、優しさなんでしょ？」

「……それは申し訳ありませんでしたわねぇ！」

くそ！　バカにされてる！

「それで？」

「……なに？」

「わざわざ戻って来たという事は、何か策があって戻って来たのでしょ？　それなら、その策……披露してくれるかしら？」

「……」

「……」

「……」

「……まさか……ないの？」

「……てへ」

「てへ、じゃないわよ！　何しに帰って来たのよ、貴方は！」

「す、少しは役に立つかなって思って！」

「立たないわよ！」

「……おい。そろそろ良いか？」

呆れたように、ランサーが手元のゲイボルグをくるりと回し、構え直す。

その姿は。

正に獣。

「……おい、嬢ちゃん」

「……なによ？」

「さっきの魔術、見事だったぜ？　俺のゲイボルグを止めるなんて……名のある魔術師か？」

「……第七階位、下っ端もイイ所よ」

「そうか。それならこれから名のある魔術師になっただろうにな」

そう言って、ゲイボルグを私の心臓の位置で固定する。

「残念だな。こんな所で死ぬなんて」

獣の眼で、笑う槍兵。

そう。獲物を見つけた、獣と同じ眼。

「それじゃ……あばよ？」

「綾香！」

床を蹴り、ランサーの体が宙を舞う。

曹操……いや、華琳の手が、私に伸びるが、間に合わない。

『死』が。

圧倒的な、『死』が。

音を立てて自分に迫ってくる、そんな感覚。

ランサーの槍が、私の胸に突き刺さる瞬間。

――――不意に、空気の質が変わった。

一陣の風。

右から、左から、上から、下から。

どこから生まれたか分からない、そんな風が。

洋間の中で吹き荒れる。

無機質に流れ続けた風が、やがて一つの意志を持つ。

そして――その風が、ランサーの突き出した槍を弾き飛ばした。

否。

風で無い『ソレ』は、風を身に纏い、ランサーと私の間に割って入っていた。

「なっ――！」

ランサーの声が洋間に響く。

突然現われて、突然割って入ってきたその『風』の姿が、月光の下に現れた。

それは、少女だった。

まだ成長過程にありそうな、小柄な体。

透き通った、まるで糸のような美しい金色の髪。

華琳と並んでも遜色の無い、風格。

そう、正に、王の如く。

……全く。今日は何て日だ。

「……問おう」

透き通る様な綺麗な言葉で、そう声をかけてくれた少女は。

「貴方が……私のマスターか？」

とんでも無い事を言いやがった。

intermission ?1（前書き）

さて、皆様お待たせしました。そろそろ待ちくたびれた頃かと思います。では、お楽しみ頂ければ……

intermission ?1

朗々と響き渡るのは、低く押さえられた、透明な音のうねり。

燈されたアルコールランプの、厚ぼったい炎明かりに

赤黒く染め上げられた壁面

寄る年月に侵食されたか、元から些事にはこだわらぬのか

揺れる焔が、積み上げられた石壁に落とした赤に

合わせ目より影が染み出してくる

炎は威嚇の声を上げ、チリチリと神経を焼き焦がすも、染み出す影は尚一層深まり

どころか、炎の威嚇を嘲笑うかのように、大きな影を揺らめかせる。

風など吹き込み様もない室内・・・否、石造りの地下墓地に揺れる影は

未開地の不気味な舞踏の様

表面を影が踊る度、石壁の隙間から冷気が流れ落ち、石室の中央に立つ人物へと

虫のように、鼠のように、汚泥のように

呑み込む悪意を持って、四方より押し寄せる。

淀んだ空気は欠片も流れていない、にもかかわらず布が、強風で煽られたかのような音が室内を埋め

壁で揺れる影は、大きく醜く歪む・・・

這いよる冷気はついに中央の人物を呑み込むほどに迫り、その直前で阻まれた。

高らかな宣言の如き、透明で大きな音は・・・中央の人物の発声器官から漏らされ。

天を切り裂くような轟音と共に、あふれ出る光芒が・・・石室を、一瞬にして満たし、呑み込んだ。

少女は白に塗りつぶされた視界が、何時正常に戻ったのかを説明することは出来なかった。

それは、意識を失っていたということではなく

視界が白に呑み込まれなかったということでも、当然ない。

完璧な術式・・・星の運び、日時、場所、方位、そして何より詠唱と魔力。

全てにおいてミスは一つもなかった。

即ち、自身の勝利を確信した瞬間・・・死を、覚悟した。
眼の前に存在する、不気味な何かに対して・・・

ソレは予定通りに魔方陣の中央に立っていた。

ソレは明らかに常気を逸していた

ソレは間違いなく・・・人ではないバケモノだった。

それなのに、全ては少女の知識の通りなのに。
呼び出した少女の、『従者』であるはずなのに・・・
呼び出した少女には、逆らえないはずなのに・・・

ソレは・・・

少女を、つまらないガラクタの様に見下ろし

少女の首に、刃の切先を突きつけて

欠片も感情のこもらない、重く硬く冷たい声で、静かにこう告げたのだ。

「お前がオレを呼び寄せたのか」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

『ヒト』というイキモノは、生物界で最弱である。

魚の様な速度で泳ぐ事は出来ず。

馬の様な速度で走る事は叶わず。

当然、虎の様に強い訳など、有り得ない。

（…なんなの？）

ヒトを、万物の頂点足らしめるのは、唯一、知恵のみ。

なまじ、他の生物より劣る部分を知恵のみで磨き上げ。

魚よりも速く泳ぎ。

馬よりも速く走り。

ついには自らの手で『太陽』とすら呼べる、強大な力をも手にした。

（……なんなの？　なんなのよ！　これ！）

少女は正しく理解している。

自らの肉体が脆弱である事を。

自らの肉体が壊れやすい事を。

自らの肉体が…生物界で『最弱』と呼ばれる、ヒトというイキモノの中でも。

…更に、底辺に位置している事を。

（…聞いてない！　聞いて無いよ、こんなの！）

少女は正しく理解している。

自らの肉体が脆弱である事も。

自らの肉体が壊れやすい事も。

そして。

自らが…『知恵』のみで築き上げた、『ヒト』という生物の中でも、一段上の『知恵』を持つ存在であることを。

少女の過信では無い。

地を速く走ったとしても、海を速く泳げたとしても、世界を七度焼き尽くす力を手に入れたとしても。

その全ての事象が…少女の前では児戯に等しい事を。

「……」

…なのに、何だ？　この状況は。彼女は誰にとも無く、心の内で問いかける。

術式は完璧だった。魔力の量も、日取りも、星の巡りも、何もかも完璧だった。

にも関わらず…得られた結果は、自らの首筋に白刃を突き付けられ、生殺与奪の権利を一手に握られるという、この状況のみ。彼女でなくても…否、自らの力量に自信を持つ彼女だからこそ、頭に血を昇らせるには充分。

「…もう一度、問う」

重く。

堅く。

冷たく。

自らに乗りかかるその声に、頭にのぼっていた血が急速に冷やされるのを感じ…同時に、自らの首筋に突き付けられた刃に、今度は肝が冷えるのを感じた。

「お前が、オレを呼び寄せたのか？」

その言葉に、感情の発露は欠片も見えず。

そもそも、その瞳は『自分』を見ていない。

例えるなら、石ころ。

自らの存在を、路傍の石程度の認識。

蹴り飛ばしても、横に放っても、そこに良心の呵責など一切見出せないであろう、そんな瞳。

「……」

その瞳は、彼女の自尊心を傷つけるには十分。

私の従者たるべき、貴方が。

私の手駒たるべき、貴方が。

私の…『サーヴァント』であるべき…貴方が。

「……そうよ」

『主人』に対して…そんな態度が、許されると思うか。

「…私が」

私が、と。

私こそが、と。

「…貴方の『マスター』よ…」

intermission ?2

「貴方、サーヴァントでしょう、マスターには逆らえないはずだわ」

少女の言葉にバケモノは僅かも動かず
黒く塗りつぶされた様な姿の中で、唯一視認出来る右目にもまた僅かな揺らぎも無かった。
漆黒の刃は少女の肌に触れる寸前で止まったまま、傷一つつけずに動かない。
沈黙を守るバケモノに・・・少女は安堵の吐息を漏らす。

「それで、一体どこの英霊なの、真名を名乗りなさい。
いいえ、その前にクラスは何なの、見たところ・・・ランサーかアサシンの様だけど」

腰に手を当て、眉を顰めながらわざとらしくため息をついてみせる少女。
自身を装って見せるまでに、精神は安定を取り戻したと言うことだろう。
冷静さを取り戻し開けた視界、見えていながら、見えていなかった事柄に、漸く意識が向けられた。

突きつけられた長柄の武器は、目の前の黒塗りのバケモノの宝具なのだろう。
バケモノ本体と同様に、光を反射することなく、空間を黒く切り取ったかのよう有るそれは、厚みも重さも全く感じさせない、どころか細部に至っては、全く解からない。
しかし、少女には見覚えの有る形状であった。

・・・これは、槍斧だ。

城に有る騎士甲冑が構えているそれと同じもの。
中世ヨーロッパで、槍斧を用いた英雄を思い浮かべようとして・・・はたと気づく。
生命の危機によって、すっかり意識の外に追いやられていた事実。

この召喚は・・・失敗したのだ、と。

少女は明確に有る対象を召喚しようとしていた。

公式に発表されても、明確に確立してもいないが、召喚される英霊には傾向がある。

召喚を喚起するに当たり、縁の品を用意することによって、呼び寄せる対象を有る程度は特定できるのだ。

少女が今回狙いを定めていたのは、神代の大英雄・・・

少女の知る限りにおいて
中世ヨーロッパに
神代の大英雄に匹敵する強さを持つ英雄は・・・一人としていない。

いや、言い方が悪い。

神代の英雄と言うのは、別格なのだ。
何しろ人と神の境界があいまいな時代である。

神の血を半分引いているような存在がごろごろといる。
そんな、純粋に存在として、人間よりも上位に位置する存在。
身体能力という点だけを取っても、まるで別物の英雄達の中において
・・・頭一つ抜けた存在。
そんな大英雄と比べれば、誰であろうと、比肩する事は難しい。
言葉を飾る事を止めるのであれば・・・話にならない。
絶対的な存在としての、格が違う。

そんな、大英雄を、半神を呼び出して共闘という名のもとに・・・使役する。

サーヴァントがマスターに、逆らい得ることなど、最初から有り得ない事。

そういうシステムを組まねば、この儀式自体が成立しないのだ。
それを少女も充分に理解しており・・・そも、それを組上げたのは、少女の一族である。
祖先の業を疑わぬ、などという贔屓目ではない。
自分以外の何者をも疑って掛かる・・・否、自分自身ですら疑って掛かるのが魔術師と言うもの。
であるが故に、魔術に関することで祖先が手を抜く事だけは無いと断言できる。

何より、それほどまでに全てを疑って見る目を持つ魔術師と言うものが。
三氏が集まって儀式を組上げ、その際に門外不出であるべき秘儀の数々を持ち寄り。
・・・魔法までも利用したのだ。

それこそ、神代の英雄であろうとも、従えることが出来る・・・
現に、漆黒の刃は少女の肌に傷つける事無く止まったのだ
言い換えるのであれば、マスターにサーヴァントが逆らい得るのはそこが限界。
少女が不注意に歩みだし、『そこに置かれた』刃に触れて傷つくことは有っても
その刃が立ち止まっている少女に向かい、それ以上進むことは出来ない。
サーヴァントには進めることが出来ない・・・そう、縛られているのだ。

少女は魔術師であり、アッシャーではなくアストラルの視点で世界を認識する。
ただの人間ではないが・・・それでも召喚される英霊と呼ばれる存在に比べれば、ただの人間とそう大差は無い。
それが、自身より上位存在を強制使役するという逆転現象をなさしめるのが、マスターによる魔力供給無しでは存在を維持できないと言う部分と・・・

令呪という絶対の命令権による、呪い。

「もう一度、今度は『マスター』として言うわ。
貴方の、クラスと真名を教えなさい」

「答える義務はない」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「…どういう意味かしら？」

戸惑った様な、訝しげな表情を浮かべる少女を前に。

…男もまた、戸惑っていた。

男とて、万能ではない。

…否、男『こそ』万能では無い、と言うべきか。

三国を駆け抜け、『魔王』という幻影を見せ、魅せて来たこの男。

相手の心情の、その全てを見通し、『伏龍』『美周郎』を手玉に取って来た男。

天下無双、と呼ばれ、全ての武将に畏怖され続けた『飛将軍』を打ち破った男。

字面だけ、為して来た事柄だけ見れば、或いはこの男は万能に見えるかも知れない。

…が、実態は、万能とは程遠い。

殆ど、狂気の様な小さな違和感の積み重ね。相手の心理の裏、思いも寄らぬ様な部分に対する布石の打ち方。自らの持つ、『魔王のイメージ』というアドバンテージを最大限に利用しただけ。

その、『魔王』という虚像に、きら星の様に輝いた英雄豪傑は惑わされ続けた。彼の思考を読もうとし、或いは彼に思考を読まれまいとし、策を練り、実践し、泥沼にはまっていく。

振り払っても、振り払っても、彼の幻影は常に付き纏い、相手の心を徐々に浸食していく。どんなに走っても、どんなに逃げても。

振り返れば、そこに『魔王』がいる。

だから、影。

相手の弱い所を突く、と言うのは軍略の基本。彼は、ただそれを忠実に守っていただけに過ぎない。

（…ここは）

故に、彼はこの『異常事態』にも、表面上は一切動じない。思考を表面に出さない、という軍略の基本を、忠実に守って。

（…どこだ？）

荒涼と、赤壁の大地を抜けた風を感じていたハズなのに。

駆け抜け、走り続けた戦場の香りを嗅いでいたハズなのに。

…最愛の少女を。

その少女に伸ばした、左手を。

その少女の頬に触れた、ほんの少しのぬくもりを…噛みしめていたハズなのに。

…これは、夢か？

…これは、現か？

或いは…あれも、これも……どちらも夢か？

「…どうしたのよ？」

不意に、少女の声が耳に入り、初めて少女をその『思考』の内に入れて。

「…なに」

鮮血を想わせる様な、赤い瞳。

腰まで届く、豊かな銀髪。

年齢相応に…否、年齢よりも幼い、その体躯。

「…なによ？　本当に、どうしたの？」

訝しげな表情を浮かべる少女に、ほんの…ほんの少しだけ、口の端を歪めてみせ。

「…『世界』は、よほどオレの事が嫌いらしい」

intermission ?3

目の前には、右目と左腕以外を視認できない闇の塊のようなヒトガタ。

呼び出したのは自分・・・完全な手順により、完全な召喚をしたというのに、呼び出された対象は、不完全な存在。

こんな事態はまったくの想定外、つまりは・・・現在、命の危機である。

あっさりと召喚の魔方陣から歩み出てこれたということは、こちらとの契約により縛り付けることが出来ていないのだ。

こちらの命令に、口答えどころか完全に拒絶することなど、サーヴァントには出来ないことなのだ・・・

もしかしたら・・・相手は、サーヴァントなどではないのかもしれない。

「一つ問おう・・・お前は、何を望んでオレを呼び寄せた」

鋼の声は静かに、少女の上に伸し掛る。

虚無のうずまく黒瞳が、真直ぐに、少女の真紅の瞳を捉え・・・心を呑み込んでゆく。

「決まっているじゃない、『聖杯戦争』のためよ」

それでも、怯えを声には乗せずに少女は返事をしてのけた。
此処で余裕の態度を崩して、こちらが不安がっているなどといつところを見せてはいけない。
相手から感じるのは、間違い用もなく邪な想念・・・そんな相手に、不安など見せればたちどころに浸け込まれ、こじ開けられ

・・・その傷に手を掛け、真っ二つに引き裂かれる。

「戦争か・・・ならばオマエの負けだ。
オレは一般人と変わらない、先程言っていたような、英霊などという存在ではない
何より戦争などというものは、したくもない」

聖杯戦争の知識もなく・・・
英霊ではないと自称し・・・
呼び出されるなり、負けを『マスター』に告げる・・・
間違いない、この眼の前の塊は、サーヴァントなどではないのだ。

そこで、ふと少女は思い至る・・・

ならば、何故・・・このヒトガタは、呼びだそうとした神代の英霊を押しのけてまで、此処に居るのだ。

このヒトガタは、なんと言った・・・

そう、確か「『世界』はオレの事が嫌い」と、そういったのだ。

つまり・・・こいつは『世界の敵』と言うこと

『世界』を・・・相手にして戦った、バケモノ

「まって、英霊なんかじゃ無いというのは信じるわ。
そのままじゃ、貴方は消えてしまう・・・手を、いいえしゃがんで」

「何を持って、その言葉を信じろと」

「現状の手探り状態に、私も貴方も嫌気が指している。
私は貴方に現在の状況を説明する、代わりに貴方はその情報に見合うだけの貴方の情報を私に教えて。
これは、お願いではなく契約よ、等価交換でそれがなされると、貴方を信じる」

等価交換・・・と来たか。

ヒトガタが僅かに目を細めると、伸し掛る様な重苦しい感覚が、少女の頭上から取り去られる。

「いいだろう、貴女のその提案に乗ろう。
礼を失した謝罪を・・・
君は確かに幼い子供だが、知性が高く、言葉の重みを知っている一級の人物だ」

・・・え？

頑なにこちらの要求を拒んできたヒトガタが、いうなり膝をついて目線を合わせた。
どころか、『オマエ』とあからさまに突き放していた呼称すらも、『貴方』或いは『君』と、こちらを尊重して・・・此方の態度が、余りに高圧的だった事を諌めるかのように。

「望むままに膝をついた、この行為をもって謝罪とさせてもらう。
では、情報交換を始めよう・・・我が名は一影、それ以外の名は捨てた故に、真名を問われれば一影となる。
ある『世界』において・・・『世界』を殺し『魔王』と呼ばれた者だ」

少女の真紅の目が見開かれる・・・

自分を一般人と変わらないと言いながら・・・
堂々たる名乗りを以て、『世界』を殺した『魔王』と名乗った瞬間
世界は凍りつくような静寂を強いられた

その言葉には嘘がない。
相手からは邪な想念を感じるが、その正体は妄執で・・・
故に、誇り高く・・・その心の高さに、誤魔化す様な真似はしないと信頼できる。

つまりは、この自称一般人は・・・『世界』を殺したのだ。

少女がスカートを摘み、小さく持ち上げて優雅に一礼する。

「見事な名乗りを頂いた誇り高き『魔王』に返礼を。
イリヤスフィール・アインツベルンと申します、先ずはその姿から・・・本来あるべき姿へと」

つっとイリヤが近寄ると、小さな手を伸ばし、一影の両頬にそっと添えると

つま先立ちをしながら、小さく唇を重ねる。

瞬間、イリヤの背筋に今まで感じたこともない寒気がはしった。
繋がったほんの小さな唇、その微かなエンゲージを通して、自身の魔力をごっそりと奪われたのだ。

こんな事・・・身体を交わしてだって、有り得ない・・・のに。

その恐怖に固まりかける身体を、無理にも引き離したイリヤの目の前には。

ヒトガタの塊ではなく・・・

影に呑まれた様な、漆黒に塗りつぶされた右腕を地につき

燃え尽きた灰の様に白い髪の奥から・・・

蒼白い顔、虚無の渦巻く双眸をイリヤに向けながら

耳の痛くなるような静寂に包まれ・・・『魔王』がそこに居た。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「…待って」

魔力をごっそり持って行かれ。

それを為した『魔王』の、その迫力に飲まれかけていたイリヤだが…そこで、はたと気付く。

「…『世界』を…殺した？」

イリヤにとって、『世界』とは『辿り着くモノ』、或いは『こじ開けるモノ』

…決して、『殺すモノ』では無い。

「…そう。オレは、『世界』を『殺し』、魔王と呼ばれた」

それが、虚言では無い事が分かる程度に…イリヤは聡く。

それが、虚言では無いと分かってしまうほどに…イリヤは聡い。

気付けば、膨大な魔力の消費で立つ事も怪しかった体が自然と立を取る。

「…情報の等価交換を、誇り高き魔王。世界を殺すとは…どういう

意味？」

聡い故、自らの口を突く言葉が、およそ常軌を逸した言葉である事が分かる。分かるが、聞かずには居れない。

「…『世界』の理を曲げ、存在せぬモノを存在させ、存在すべきモノを存在させなかった」

…つまり。

「『世界』そのものを…捻じ曲げた」

何でも無い様にそう呟く…正に、呟くと言う表現がしっくりくる男の言葉が耳朶を打ち。

「…」

…イリヤは、言葉を失くす。

……『世界』そのものを捻じ曲げる。

何でも無い事の様に言ったこの言葉が、どれ程の意味を持つのか、

果たして眼前の男は分かっているのだろうか？

『世界』とは、生きとし生けるもの、その全てが存在し、やがて消え行く場所。言うならば、自らのレゾンデートルを立脚出来る、唯一の場所。

どんなに神聖な神々も。

どんなに高名な悪魔も。

ましてや、『唯の一般人』程度が、その『世界』に干渉などおこがましい。怒りを抜け、呆れを通り越し、憐れみすら覚える程の…愚言。

自らの存在する『世界』を殺すなど、文字通り人知を…否、神の御業すらこえる、超神秘。神でも、悪魔でも超える事の出来ない領域。

…もはや『聖域』

『魔法』など、児戯。そんなコトが出来るなど、それこそ『世界』にしか――

「…」

そこで…イリヤは気付く。彼女が、聡いが故に。

『世界』を殺す事が出来るのは、『世界』のみ。

神でも、悪魔でも、まして人でも無く…ただ、『世界』のみ。

…思えば、なんと簡単な演繹法か。

『世界』を殺す事が『世界』のみで…ならば、『世界』を殺した明言するこの男は。

「…は…ははは…」

口元が自然に笑みの形を浮かべる。

その笑みは、愉悦か……もしくは、皮肉か。

求めて、求めて、求めて。

自らの肉体すら弄り回され。

何十年、何百年と、一族が血道を上げて探し続けた、その命題。

…その、命題の答えが。

「…神代の英霊を押しのけて召喚されるだけは…あるわね」

彼が、『魔王』と名乗った『一影』が、果たして何者かは分からない。

彼が自分で言ったように、彼の『サーヴァント』としての能力は、他のサーヴァントの誰よりも弱く、およそ戦闘向きでは無いのだろう。きら星の様に輝く英霊の中では、恐らく、『最弱』

それでも、『魔術師』という見地から見れば。

……魔術師の『解答』としては……恐らく、『最優』

「…聖杯戦争なんて…戦う必要、無いじゃない」

…既に、『答え』は手にした。

自らの、臨むべき運命では無く。

自らの、望むべき運命の、その扉が開かれたと。

「…情報の等価交換だ、幼き賢者よ」

今度は…心からの愉悦を浮かべる少女に。

「…現状の把握を。ここは…一体、何処だ？」

魔王は静かに問うた。

intermission ?4

「いや、この問掛けでは不足。
等価というのなら、こう問わねばならん。
イリヤスフィール、君は『何だ』そして・・・
何になろうとしている」

ぞわりと、震えた。

背筋が?否・・・魂が。

服も肉も骨も、魔力に寄る精神障壁すらも突き抜けて

いま、イリヤは・・・魂を鷲掴みにされていることを悟った。

『最弱』・・・たしかにそうだろう。

一般人・・・魔術の素養も無ければ、魂から英霊としての格も感じられない。

『サーヴァントとしての能力』・・・なんて、くだらないのだ・・・
この私という存在は。

そんな、程度の低い次元での判断で、相手を見ようとしていたの

か。

物質的な抵抗？
魔術的な抵抗？
馬鹿馬鹿しい、そんなものが目の前の魔王に何の意味を持つのだ。
彼は、自分に告げたではないか・・・
『世界』を殺した、と。

コノメノマエニイル『魔王』ハ、ソンナソンザイナノダ

その魔王が、虚無を湛えた瞳を向け、鋼の声で問うてきた。
自分は『何で』・・・『何になろう』というのだ、と
この問いかけは、確かに先程の自分の問い掛けと等価だ

先ほどの自分の問いは、言い換えるのならば・・・
『世界を殺す方法を教えろ』と問うたに等しい。
即ち、『世界とは何か』という概念的命題を、唐突に突きつけたと言うこと。

であるのなら、寧ろ当然の問い返し。
『魔王』は、こう言っているのだ。

それを問うたからには、問を発した存在である君は・・・
『世界』に対してどう言った立ち位置にいるのだ
そして・・・『世界』と、どういう関係になろうというのだと

嘘も誤魔化しも効かない、鋼の声は静かにそう告げている。
自分自身ですら意識していない欺瞞ですら、虚無の瞳は見ぬくだろう。

『魔王』からは、逃げられない。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「……イリヤスフィール・ファン・アインツベルン。ドイツ人。聖杯戦争を戦う、マスター。貴方を召喚した魔術師。これ以上……どんな説明が？」

逃れられないと知って尚、足掻くイリヤを誰が責められるか。
見た目以上に齢を重ねているとは言え、イリヤもまだ十と八。魔術師としての教育も受け、それなりに修羅場を経験していても…

そこに、希望や幻想を抱く程度に、イリヤは幼い。

「…オレは、情報の等価交換を求めた筈だが？」

勿論…そんなイリヤの児戯が、魔王に届く筈も無く。

幼子の様な容姿であっても。

仮に…どれほど、彼女の容姿が、彼の『妹』に酷似していたとしても。

「…イリヤスフィール・ファン・アインツベルン。魔術師、アインツベルン家が、冬木の聖杯戦争の為に作りだした先進型ホムンクルス。聖杯の『器』」

そんな瑣事で、手を抜く魔王では無く。

そんな些事で、惑わされる魔王でも無い。

「まだお母様のお腹の中に居る時から様々な呪術処理を受けているから、魔術回路の総数自体は多いわ。経験は…悔しいけど少ない。だから、『魔術師』としてはまだまだ未熟。それでも……聖杯戦争には、『最適』」

「…最適、か」

「聖杯戦争を勝つためだけの…聖杯を手に入れる為だけに、『作られた』存在だから」

そこで、溜息を一つ。

「アインツベルンが…聖杯を、根源を知る為だけに作った、ただの人形だから」

年に似合わぬ…自嘲の笑みを浮かべ。

「『私が何者か』という問いになら、私はこう答えるわ」

結局…一緒よ。私達は、と。

「…ほう」

世界を捻じ曲げ、理を壊し、世界を作り変えた、この男は。

『一つの世界を終わらせた』この男は、同時に『一つの世界の始まり』を知ったモノ。

勿論、質量的な意味での終焉でも。

宗教的な意味合いでの終焉でも無い。

「…原因があり、それに伴って結果がある。だから、因果。結果の出ない原因は無く、原因の無い結果は無い」

『聖杯』が、『魔法』への道標で。

『魔法』が、『根源』への近道で。

『根源』が、『世界』の始まりの場所で、あるのならば。

「『聖杯の器』である私は…『世界の始まり』を知る為の、ツール」

『既に知ったモノ』と。

『これから知ろうとするモノ』と。

『魔王』と『魔術師』の違いは、ただそれだけであり。

手法も、意義も、そもそもの目的も、根源的な欲求も、何もかも…違うとしても。

結局…行きつく場所は同じ。

「…ただ…私には、それを知る権利が無いだけで」

聖杯の器として、根源に至る道筋に置かれた、イリヤスフィールという『ツール』は。

普く魔術師が手に入れる事に最も近く。

にも拘らず、世界の根源に届く事は有り得ない。

それでも尚、魔術師の原初の欲求として、根源に興味が無いわけでも無く。

…否、自らを『ツール』としたアインツベルンが求める『根源』に対する興味は、なまじの魔術師よりも強いかも知れない。

「…これが、私の『答え』よ」

そう、答えるイリヤに。

「それでは…もう一つ、問おう、幼き賢者よ」

魔王は。

「君は…一体、『どうしたい』？」

追及の手を、緩めない。

intermission ?5

そう・・・眼の前の男は、最初から逃げ道など用意させてはくれなかった。

むしろ、『逃げ道はないぞ』と最初からイリヤの周囲を全て包み込んでみせたのだ

A　『君は何だ』

と

Ω　『君はどうしたい』

という、全てを表す言葉で・・・

『逃がす』という認識自体が、この眼の前のバケモノにはないのだ・・・出会った瞬間に、既に。

そして、その上で尚・・・此方の意志を尋ねてくる。

それも、悪魔の囁きでもって・・・

イリヤは内心舌を打った。

『魔王』・・・ね、誰だか知らないけど、最初にそう呼んだ人は、人を見る目だけは褒めてあげるわ。

一影が問い掛けたのは、『君はどうする』ではなく・・・『どうしたい』だ。

そこには、自分の置かれた立場や、自分に掛けられている期待や、自分のなすべきことどころか、全体的に見て最良と考える選択を・・・

含めてもいいし・・・含めなくてもいい。

言い換えるのならば、イリヤのむき出しの魂に爪をたてた『魔王』には、次の答えにどれだけの虚飾をつけて答えているのか、全てさらけ出される。

故に、名を告げた後だというのにイリヤと呼ばず、『幼い賢者』と呼びかけてきたのだ。

お前は、賢者であることを望むのか、それとも賢者という虚飾を捨てるのか、と。

最悪なことに・・・自身の問い掛けの意味をイリヤが理解することもまた

『魔王』は理解してこの問い掛けをしている、そしてイリヤがそれも気がつくということもまた・・・

「言ったでしょ・・・『聖杯戦争』で、勝利を収める事が、私が生まれてきた意味だって」

そう言って上げたイリヤの視線は、真直ぐに見下ろす虚無の瞳に一瞬にして捕らえられ、そらすことが出来なかった。

しまったっ・・・魔眼

イリヤの見上げたまま固定された視界の中で、『魔王』が僅かに目を細めた。
その目が静かに、だがはっきりと『くだらない』と告げる。
冷たいと評するに足りぬその視線は、まるっきりイリヤから興味を失っていた。

そこから流れだす無言の言葉を、イリヤの心は拾いあげていく。

『最適』に『作られた』存在だから、そのまま『道具』として役目を果たして満足するのなら・・・そのまま賢しげに賢者を模した『人形』として死ね。

心を告げられぬ『奴隷』であるのなら、見知らぬ誰かに褒められることを夢見て、豚のように死ね。

つかむべき望みも、意志もなく戦に臨むなら・・・今、この場で、死ね。

イリヤの胸ぐらを、影に染まった右手で掴むなり、無造作にその小さな体を持ち上げ目線を強引に合わせるなり、鋼の声は静かに告げた。

「権利などという共通幻想に浸っているのなら、一つ問おう・・・
お前には、生きる権利があるなどと
何故、勘違いしていられるんだ？」

必死な努力をしても、足掻き、もがき、泥を這いずって・・・それでも何万、何十万と人の死ぬ戦場を駆け抜けて来た一影にとって、『権利』などという物は、平和な世に生きるものの寝言でしかない。

『権利』があれば、黙っていても与えられ

『権利』がなければ、何をしても無駄になる

そういったものに、真っ向から反発して、『世界』をねじ曲げてきた男だ

「そんな幻想に浸って、それを尊守するというのなら・・・するがいい

オレには・・・お前の生き死になど関係ない」

重く低い鋼の声がそれだけ告げると、イリヤの身体は重力を思い出したかのように、硬い石畳の床に落ちた。

その痛みを感じることも、いきなり手を離した『魔王』に対する文句をいうことも頭に浮かばず、呆然とイリヤは冷たい床から・・・去っていく男の背を見上げていた。

その広く大きな背が・・・一体どれだけのものを支え、背負ってきたのか。

自分が・・・

『結局…一緒よ。私達は』

などと、どれだけの思い違いを・・・
『魔王』への侮辱を口にしていたのかを思い知らされて。

「・・・てよ、・・・まって、置いて行かないでっ。
負けたくない・・・勝ちたいの、『聖杯戦争』に・・・私を縛る、この『世界』にっ
だから、助けて・・・
権利なんて関係ないっ、私が・・・私で居たいから！」

硬い足音

睥睨する虚無の瞳

だがそこには嘲笑う色は欠片もなく

それは・・・イリヤの直ぐ目の前にあった。

「戦う前から負けているものとは共に戦えない。
戦友に心を隠すものになど、命は預けられない」

イリヤ小さな体を、先ほどの乱暴さからは信じられないほど丁寧に。

まるで壊れものであるかのように右腕で抱き上げ、出口へ向かう
『魔王』の足は足音を立てなかった。

intermission ?6

「……ねえ、魔王」

魔王の右腕に抱き上げられながら、イリヤは問う。

「・・・一影。そう名乗った筈だ」

「魔王で良いじゃない。格好良いし」

「『魔王』の何処が格好がいい。

何度止めさせようとしても、『魔王』と呼ぶ事を止めなかったヤツがいた

・・・それで定着しただけの呼び名だ」

その、一影の言葉に。

「…」

イリヤは、少なからず驚きを覚え…何とかそれを隠す事に成功する。

…今、この男は…何と言った？

「……世界を捻じ曲げたのよね？　貴方」

「ああ」

「そんな貴方が、なし崩し的に『魔王』と…」

諮詢は、一瞬。

「呼ばれたくない名前で呼ばれる事を…認めたの？」

だって…そうでしょ？

この、冷たく、固く、堅いこの男が。

世界を殺したほどの男が。

自らの意に沿わぬ事態を…許した？

「そうだ」

「…」

「…そういう奴だった、としかいい様が無いが」

「…何者よ、それ？」

圧倒的な存在感を持つ『一影』をして。

…彼に、望まぬ『敬称』を受け入れさせた存在とは。

「オレの…片腕だ」

「……は？」

今度は…驚きを隠す事に、失敗する。

「それより、イリヤ。何か俺に聞きたい事があったのではないのか？」

この話題はここまで、とばかりに打ちきり、虚無の瞳をイリヤに向ける一影。

冷たく。

堅く。

それなのに…暖かい、と感じてしまう瞳。

「…ねえ、一影。貴方…」

自らを抱えあげる右腕に、今以上にしがみつき。

「…娘が、居た？」

「『オレ』にはいなかった。オレ以外の俺には・・・解らない」

どうして、そう思う？　と、問いかける一影に。

「どうしてって…」

イリヤの脳裏に浮かぶ、記憶は。

アインツベルンの、冬の城で。

『父親』と一緒に、胡桃集め競争をした、記憶。

あの時、『父親』は、優しい瞳でこちらを見つめ。

勝負に負け、不貞腐れるイリヤを、優しく抱き上げ。

『ほら。高い所の胡桃を集めれば、イリヤの勝ちだよ』と。

優しい声音で、語りかけてくれて。

「…なんとなく、よ」

まだ、『イリヤ』が『イリヤ』で在られた時の、優しい記憶。

『イリヤ』が『イリヤ』で在った時の…幸せな、記憶。

「…『妹』は居た」

「妹？」

「どれも、血の繋がりは無いが」

そう言って、遠くを見つめる様な瞳は・・・

感情など欠片も映しはしないというのに・・・

酷く・・・辛そうな色に、イリヤには見えた。

「…」

イリヤの心が泡立つ。

先ほど、あの虚無の瞳に見つめられた際に覚えた、身の竦む様な感情の動きとは違う…不思議な、感情。

絶対的な恐怖の主が・・・絶望を腕とし、心臓を掴み上げる『魔王』が

『世界』をねじ曲げたバケモノが・・・

妹・・・それも血も繋がらないという少女達を思い

静かに・・・懺悔をしている様に、イリヤには感じられた。

自分の勘違いかもしれない、いやたぶん勘違いなのだろう。
恐怖から解放された心が、相手にも感情があると誤動作をしているだけ・・・
しかし、何故だか無性に気に掛かった。
そして、魔術師の勘というものは、何らかの必然があり・・・
原因が見えずとも、結果を心が捉えたものなのだ。

「…決めたわ。
私は…貴方の事、『お兄ちゃん』って呼ぶ」

・・・なにを、言い出したんだこの娘は。

「『一影』という真名で呼ぶなんて、聖杯戦争では弱点をさらす様なもの。
まぁ、貴方は英霊ではないという話だけど・・・
でも、『魔王』って呼ばれるのがイヤなんでしょ？
それなら、『お兄ちゃん』って呼ぶ事にする！」

本来。

『聖杯戦争』において、『真名を呼ばない』と言う暗黙のルールは、召喚される英霊の知名度が軒並み高く、真名がそのまま弱点に繋がるという前提があるからに他ならない。『一影』という存在の知名度が高く…否、『無い』以上、真名で呼んだ所で、聖杯戦争には何ら差し支えは無い。

「…断る」

「いいの！　私が呼ぶって言ったら呼ぶ！」

返って来たのは、虚無の眼差し。

「妹の一人とは約を違えてしまった。オレを兄と呼べば・・・因果の糸が絡むぞ」

鋼の声が告げるのは、この上なく冷徹な事実。

『世界』をねじ曲げた『魔王』が、『魔術師』の少女に語る真理。

言葉の重さを知ると『魔王』が認めた少女には、突き放せない・・・事実としての重さ。

どちらが『魔術師』なのかと、疑いたくなるような、非の打ち所のない程、冷徹にそれを説いたその口が、次いで紡ぎ出す言葉に

少女は未だかつて無い戦慄に襲われる・・・

鋼の声は、無慈悲に、低く冷たくこう言い放った。

「先ほど実体化した際に認識した。
オレに割り振られたクラスは・・・『狂戦士』だ」

intermission ?7

少女はその音の連なりを、認識できなかった。
否・・・理性が、認識することを、拒んだ。
それは、本能的な回避行動

オレニワリフラレタクラスハ『バーサーカー』ダ

理解してしまえば・・・
今、自分を襲っている戦慄の・・・
一体、何倍の恐怖が押し寄せてくるのだろう。

無意識に予測した心が、その事態を回避するために
いや・・・回避はできないことも解っている。
せめて、無防備にその事実にさらされることの無いよう
心に防衛準備をするために行った、無意識の・・・本能的な遅滞行動。

クラスハ・・・『バーサーカー』

ただの人間にしか、外見上は見えなかった。
本人も、ただの人間と変わらないと・・・そう告げてきた
英霊と戦うことなど、『ハズレを引いたな』と、その虚無の瞳も告げている。

イリヤに・・・『魔術師』にとってそれは、出来の悪い冗談でし

かなかった・・・

話して見る前も、情報交換をした後も。

・・・そして今も、思い知らされ続けている。

恐怖と絶望を従える『魔王』だと、わかっていた。
『世界』をねじ曲げる、規格外のバケモノだと理解していた。
だが、それが所詮は『解ったつもりになっていただけ』ということを・・・

『魔王』の言葉は・・・

目を逸らすことも、完全に拒む事も出来ぬ

完全な真理の死角から・・・心に浸透してくる毒

『魔術師』である自分を説き伏せ
徹底的に感情を排除した、銀糸に飾られた黒衣の魔王は・・・
自分のクラスを、低く、重く、静かに

『狂戦士』・・・理性なき狂気だと、告げたのだ。

有り得ない・・・これは心底ありえない。
『狂戦士』が自分のクラスを告げたという事例なら、探せばあるかも知れない。
だが経験は足りないとは言え、イリヤは魔術師だ、常人とは異なる視点をも持っている。

そのイリヤを説き伏せる『狂戦士』など・・・存在そのものが矛盾。

魔術師に真理を説く『狂戦士』など・・・槍を使わない『槍兵』や、弓を使わない『弓兵』どころか、真正面から名乗りをあげる『暗殺者』・・・否。

魔術を使えない『魔術師』よりも有り得ない。

動揺したイリヤだったが、とあることに気が付き、瞬時に平静さを取り戻す。

「念の為に確認なのだけど・・・貴方は今、『狂化』状態になっていない

つまり、『狂化』のオンオフを意識して切り替えられる、ということよね？」

これはとんでもない事だが・・・そうであるのなら、納得が行く。

「残念ながら・・・元が大したことのない実力のために『狂化』という状態にあって尚

英雄、いや・・・英霊だったか、とやらに比肩しうる戦闘能力は望めない

『狂化』されての実力が、これだ」

イリヤの言葉を、自身の能力が低い為になされた勘違いと一影は受け取り・・・軽く肩を竦めてみせる。

呆然とそのさまをイリヤはしばらく眺めていたが、熱にうなされ

た様な、どうしようもなく震える声で、何とか言い返す。

「『狂化』された状態で、なに冷静に自己分析してんのよ・・・そんな事、出来るはず無いじゃない！

どんな英霊だって、聖杯の導きで呼び出された以上、その定めたルールに縛られる！

『狂化』されたのなら、正常な理性なんか残ってる筈ない！」

一影の細めた眼の奥で

虚無の瞳がイリヤの深紅の瞳を射抜き

ほんの僅かに、口の端を歪める。

「何故、声を荒げる必要がある」

鋼の声は常変わらず硬質で重厚、その物言いも変わらず突き放すようであるが・・・

イリヤには、何処か一影がおもしろがっているかのように感じられ、頬を膨らます。

「今まさに、その口が答えを言った通り・・・

『聖杯の導きで呼び出された英霊』は、定められたルールに従う。

『狂化』されたなら、正常な理性など残っていない、と」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「…どういう事よ？」

一影の『解答』に、頬を膨らませたまま…イリヤは自身の頭をフルに回転させる。

「貴方…今、自分で言ったわよね？　『クラスはバーサーカー』だって」

「ああ」

「バーサーカーって言うのは、狂戦士。文字通り、『狂った』戦士よ？　その狂った戦士が」

そう言って、肩を竦めて見せて。

「…魔術師相手に冷静に話をして見せるなんて…」

悪い冗談よ、と。

ねめつける様な視線を一影に向けるイリヤ。

「…ふむ」

その、イリヤの視線を、さも面白そうに受け流して。

「では…逆に問う、イリヤ」

「なに？」

「君の『常識』では…」

『世界を殺した』等という人間は…果たして、正常だと思うか？

「……っ！」

問われて、イリヤは思い至る。

いみじくも……自分で、思ったのでは無いか。

『世界を殺すなど、神の神秘すら超える、超神秘』と。

『滑稽を通り越して、憐れみすら覚える』と。

……そんな行為は……

『常軌を逸している』と。

「…そうね。確かに貴方は……正しく、『狂って』るわ」

自らの存在を超越する存在。ソレが、世界。

どう考えても。

如何に悩んでも。

世界を殺す方法なんて…否、殺そうと思う『発想』すら、普通は浮かんでこない。

さながら…風車に飛び込むドン・キホーテ。

痩せ馬に跨り、風車に向かって突進した彼は、やはり『狂人』であり。

……風車を倒してしまったこの男は……彼を上回る、『狂人』。

「……ねえ、一影」

「なんだ？」

「貴方…召喚された時、右目と左腕以外、影だったわね？」

「それが？」

「それは…『世界を殺す』為の…贄としたの？」

魔力不足で有れば良い、と思う。

召喚の失敗で有れば良い、と思う。

むしろ…そうであってくれと、そう、強く願う。

「…安いものだったぞ、『世界』は」

まるで、『右目と左腕を残して殺せた』と、言わんばかりの一影の言葉に。

「……信じられない。貴方……正気なの？」

イリヤの言葉に、ほんの少しだけ、口の端を釣り上げて。

「今更、何を。オレに…正常な理性など、残っている筈が無かろう？」

そう言って、『狂戦士』は静かに嗤って見せた。

「それは…『世界を殺す』為の…贄としたの？」

魔力不足で有れば良い、と思う。
召喚の失敗で有れば良い、と思う。
むしろ…そうであってくれと、そう、強く願う。

だが・・・

『魔王』の言葉は

イリヤに希望の糸を垂らしはしない

「ある女の為に支払った・・・必要な代償だった。
『世界を殺した』のは・・・
オレの目的に『世界』が邪魔だった、それだけのことだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0072x/

聖杯†無双

2011年10月5日23時48分発行